

越州沙門良寛と秋艸道人・會津八一 — その俳句をめぐる一考察 —

北 嶋 藤 郷

我等は郷党の高僧として、また奇人として、良寛禅師の逸話に耳慣れ居たりしが、禅師の歌として聞きしものは、みな云ひしれず懐かしき響きありて、我等が幼児教えこまれし小倉百人一首の類とは、いたく調子の異なるものあるを、かねて怪しみ居たりしに、これぞ『万葉集』の調子なりけるよと、初めて悟りしことも深き喜びの一つなりき。 (『鹿鳴集』後記、S.15.2)

俳句を募る

縣下の俳壇に會津八朔郎を有するは尚ほ中央散文界の夏目漱石を有するが如し。漱石の著作一たび出でて洛陽の紙價忽ち貴く、朔子逃晦すと雖も自ら詞場の重鎮たるを失はず。今三年鳴かず飛ばずしてしかも当時に比し造詣幾層の深さを加へし彼は、再び馬を陣頭に立てて本誌上に其の豊麗の中に閑寂の氣象を蔵し、枯淡の間に雄大の精力を包める勁健の句風を鼓吹せんとす。光彩必ずや諸君の目を眩するものあらむ。同好の士、希くば来たりて此の偉觀に參じ、明鏡台下に自家の妍醜を弁ぜよ。課題は唯季節に應ずるを取り、投句は必ずしも多きを厭はず。

(『新潟新聞』M.40.5.9付)

はじめに

2009年3月1日、第一回「阿賀北ロマン賞」受賞式で、シンポジストのひとりである良寛研究家・書家の加藤禧一氏は、良寛の文学が秋艸道人・會津八一(1881-1956)に与えた影響を語った。それによると八一は、良寛歌の中から(「風物」(春夏秋冬)73首、「詠懐」33首、「寄情」27首、「来往」18首に区分けして)151首の秀歌を抄出した。會津八一筆「良寛歌集抄」とでも名付けるものであろう。また、大島花束・原田勘平訳註『良寛詩集』(岩波文庫)にびっしり書き込まれた、八一の註記の中で、良寛詩の出典に関する文献は46種にのぼるといふ。まだコンピューター検索の

できない時代にあつて、八一の博覧強記ぶりには驚かされる。後年、八一は「良寛なら良寛の心と、或いはその芸術心とこちらの芸術心とが、どの所かで、のっぴきならぬ感交がなくてはならない」(「文化の反省」)と述べている。八一がこれほどに良寛研究に没頭したかを知る人は、意外に少ないように思われる。

新潟市が生んだ會津八一は、「Humanity as a wholeを美とも真とも神ともして、個人に於ける人間性の完全完備を希求するのが、僕が半生の主張である。僕が希臘生活をよろこぶのも、古事記の神代の巻を愛するのも、この故である。」と親友の伊達俊光宛の書簡(M.39.9.2)に認めている。彼は19世紀の文明にあきたらなさと感じていた。分業主義の余弊として、社会形状の異常さ(deformity)にみちたこの世紀のあわれなる光景にたいする悲憤の熱涙を禁じざるをえなかったからである。

彼は早稲田大学卒業後、明治39年9月から越後中頸城の有恒学舎に英語教師として赴任して以来、早稲田大学教授として60過ぎまで英語の教師であった。八一が専攻したイギリス・ロマン派とその流れを汲む詩人や文人の作品が、八一の俳句や短歌・書道・学問や人生諸般の礎となっていることはあきらかである。彼の奈良美術へのとば口としての英学の役割は、きわめて大きい。英学が西洋文化の受容のであった時代の典型的な姿といえようが、八一は「英語を通じての教育」(Education through English)に力を入れた。欧米の文化への潜り戸として英語の必要性を学生たちに説いた。彼は奈良美術などの研究や創作で一家をなす前に、英語の教師であり、一家をなしたのちもそうであったこともこれまたあまり知られていないようである。

良寛は越後の国上山の五合庵に住み、大自然の中に融けこみ、万有とひとつになり、白雲のごとく、野の草花のごとく生きた。究極の孤独と清貧のなかにありながら、恩寵と法悦の中に充足して生きた。中世隠遁思想の実践者の西行も芭蕉も良寛ほど完全に美しく、造化に帰入して生きてはいなかった。

石田吉貞著『良寛』の「あとがき」には、執筆動機を次のように語っている。「(良寛)が真に好きになったのは、かれのうちに、人間のかなしみがもっとも純粋な形でもたれていることを知ってからである。かれの詩、かれの書、かれの生きかた、それらのなかには、すべて原生林の樹幹のようなかなしみがある。カミュの『異邦人』で説教師が死刑囚に向かって、「ごらん、牢獄の壁はみんな汗をかいている」という場面があるが、良寛のすべては涙を流しているのではないか。詩も書も行動も、みんな涙を流

しているのではないか。五合庵にあれほど人が集まるのも、秋風や落葉のなかで、柱や壁から流れる涙を感じ、人間の原生的なかなしみを感じたいためではないか。私が、生きているうちにどうしても良寛を書きたいと思ったのは、そのことを知ってからである。」と記している。著者は青年のころ、越後で相馬御風の講演に耳を傾けたことがあった。「良寛は大志を捨てて郷里に帰臥し、自己一個の生を守って、岩間の清水のようにしずかに生涯を終わった真実の詩人である」というのがその講話の要旨であったという。良寛のなかに、真摯な近代人的人間像をとらえた御風良寛像は、ひどく新鮮で魅力的であったという。

良寛の歌やその人となりを広く世に知らせたのは、相馬御風と斎藤茂吉である。しかし、越後には良寛を敬慕する人は多かったのだが、良寛の芸術の真価を知らしめようと口火を切ったのは、會津八一であったことを忘れてはならない。今日の良寛研究の隆盛の一端を八一が担ったといっても過言ではないであろう。

大正3年、長岡中学で教壇に立つ西郡久吾の『北越偉人 沙門良寛全伝』(本文760頁)が上梓された。良寛の克明な事跡を研究したこの待望の書物の発刊により、八一はようやく人間良寛に触れることができた。この大部な書物では、良寛の生活ぶり、物の考え方など、良寛の一生の軌跡が詳細に綴られている。

會津八一の「相馬御風を偲んで」(『會津八一全集』11巻)という文章を援用すれば、「良寛は越後の偉人で、われわれは子供の時からその逸話を聞かされて居たし、私などは早い頃からその歌集を愛読して、その影響を受けて居るし、二十歳の時に正岡子規に面会して、良寛の存在を告げたものであるから、それから二十年も経って、相馬が良寛を説いたといっても良寛の発見者とも創唱者とも申しかねるが、かうした熱情家である相馬君が、この燃ゆるが如き心を以って彼自身の良寛を見出したのであることは拒むことができない。昔から枯淡だとか大悟徹底だとか無欲だとかいふ風に上品にあっさりと、しかしながら月並みに、概念的に高く祭りあげられて居た良寛を、多感多情の、温かな血の通った人間に引き下ろして多感多涙の人間良寛を刻み上げたのは彼の偉業であった。」とある。それゆえに相馬の語る良寛は、良寛であると同時に相馬自身でもあったことを認めなければならない。良寛と相馬御風はまさに一体化していた。のちに御風は、「良寛さまを想う」という詞書の短歌、「鉢の子に落ち栗あまた拾いため足れりと一人微笑みにけむ」を残している。

しかし八一は、良寛の発見者であり、創唱者は自分自身であり、相馬君

より20年も早いのだよ、とひそかに胸をはってみせているところが八一らしいところでもある。大正5年、相馬が早稲田大学を捨てて、越後の郷里・糸魚川に帰郷する時、「良寛をやってみたら」と薦めたのは、他ならぬ會津八一であった。

本稿の眼目は、良寛の和歌・俳句と良寛を讃仰した會津八一の短歌・俳句を中心に、正岡子規ら先達の著書や論考を参照しながら、いくつかの比較考察を試みたい、と考えている。

正岡子規と會津八一

近代俳句の黎明期にある明治29年、子規庵での新年句会には、日清戦争従軍時に知り合った森鷗外、東京帝大時代から親友であった夏目漱石、内藤鳴雪、そして子規の高弟の高浜虚子や河東碧梧桐など豪華な顔ぶれが揃っていた。この頃、鷗外は既に著名な文学者であったが虚子や碧梧桐はまだ無名であった。

子規は日清戦争では、従軍記者となるが、帰国の途中の船の中で咯血し、肺結核で病床につく。それ以後、脊椎カリエスで長く病床六尺で暮らすことになるが、生活面では母や共立女子大学を中退した妹に支えられ、創作活動は衰えることはなかった。その頃、子規は俳道の研究に没頭し、「俳句を研究せねば、足利以来の日本文学とその思想は到底鮮明することは出来ない」と語った。また、30歳頃から歌道の革新を思い立ち、明治31年には、「歌よみに与ふる書」(1~10)を書き、短歌の革新にも情熱を傾けた。「紀貫之は下手な歌よみにて古今集はくだらぬ歌集に有之候」(「再び歌よみに与ふる書」)という当時としては歌壇の反逆児としか思えないような宣戦の言葉を放った。彼は、歌壇一千年の惰眠を覚醒し、写生趣味による真実味と自然味とを短歌に注入したことで知られる。また文章の革新をも思い立ち、写生趣味を加えた言文一致の文を発表し、真実を自然のままに写生するのでなければ、永遠の生命ある文章を得ることはできないことを唱道し、いわゆる写生文なる一派を興すにいたった。しかし、子規は、明治35年に36歳で力尽きた。

子規の高弟には、河東碧梧桐と高浜虚子がいる。子規は両者の句作を「碧梧桐は冷やかなること水のごとし、虚子は熱きこと火の如し」と評し、前者は写実に傾き、後者は理想に傾くことを指摘した。子規の死後、しだいに俳壇は碧梧桐派と虚子派に分裂していく。漱石が『ホトトギス』で連載した『吾輩は猫である』や『坊ちゃん』が爆発的に人気を博したが、漱石が朝日新聞社に入社、『ホトトギス』に原稿を回せなくなると、

この句誌の読者は激減した。虚子は、財政難に陥った雑誌『ほととぎす』に専心して、俳句復歸を果たした。子規が俳句を革新し、虚子がそれを受け継ぎ発展させたのである。

子規のことを夏目漱石は、「非常に好き嫌いのあった人で、滅多に人と交際などはしなかった。僕だけどういものか交際した。一つは僕の方がええ加減に合はして居ったので、それも苦痛なら止めたのだが、苦痛でもなかったから、まあ出来ていた。こちらが無暗に自分を立てようとしたらとても円滑な交際の出来る男ではなかった」(『漱石全集』第16巻)といっている。

学匠とも知の巨人とも謳われた文化人・會津八一は、万葉一良寛一子規一八一という精神的系譜意識を生涯もち続けて文藝(俳道と歌道)に精進した。八一が越後の詩僧・良寛の歌を愛読したのは18歳の頃からである。

彼は明治32年ごろから句誌『ほととぎす』に投句し、その翌年6月某日、根岸庵に正岡子規を訪問したのは、弱冠20歳の時である。子規は万葉集を手本として、写実と素朴な生命の直接的な描写を目標に掲げ「根岸短歌会」を創設した。根岸庵の近くの露地近くにくると咳きこむ子規の声が聞こえた。この日の八一の期待はいかほどであったろうか。良寛の芸術を紹介したいという八一の胸の鼓動の高まりも強かったであろう。梅雨の煙るが如き庭上の青葉を眺めながら、約2時間の面会で、八一は俳句、和歌の革新、漢詩の革新などについて質問した。その時の子規の眼光は炯々として、これほど鋭い眼をもった人を今まで見たことがなかった、と八一はいつている。子規の情熱は、八一に少なからぬ感化を与えたようだ。

子規は自ら墨を磨り、3首の短歌(「ほととぎすその一聲の玉ならば耳輪にぬきてとはに聞かまし」など)と2句の俳句(「さく花も乏しき庭の茂りかな」など)を書いて八一に与えた。昼食には井物のもてなしをうけ、打ち解けた八一は子規に向かって、「万葉調を高く評価しておられるが、越後の良寛禅師の歌をご存知であるか」と質問した。ところが子規はまだ良寛を知っていなかった。(『鹿鳴集』後記に、「子規子に向ひて我が郷の良寛禅師を知り玉ふやとただしたるに、否と答へられたり」とある。)帰郷後にすぐ『僧良寛歌集』を子規の許に贈り、まもなく子規は『ほととぎす』に良寛禅師に関しての一文を載せた。子規の理解は、不十分であり誤解もしていた。しかし、子規にはじめて敬仰する良寛を紹介したという事実は、八一にとっても誇り高い出来事であったと推測される。

子規と八一は生涯にたった一度しか対面したことはなかったが、初対面の印象を「唯だ刻々人に迫るが如き一種の人格の力を深く感じて帰った」

と八一は「我が俳諧」の中で語っている。また、子規の『俳諧大要』の中の俳句の定義として、「俳句は文学の一部なり。文学は美術の一部なり。故に美の標準は文学の標準なり。文学の標準は俳句の標準なり」と断定していることを紹介している。「美とは何ぞや」、「如何なるものが美なりや」、「美の標準は何処に在りや」と問えば、「各個の感情に存する物なり。故に先天的に存在する美の標準はなし。」と子規は答える。自分自身が不羈の才を持ち、時に傲慢不遜にもみえる態度をとった八一であるが、子規を誇り高い恩師として、八一の高弟にあたる歌人であり、良寛研究家の吉野秀雄などに、「正岡は見識が高かったよ」と折りあるごとにいったという。

江戸時代の俳壇は、投句料や添削料で生活する宗匠が幅をきかせていた。蕪村の時代は、西行や芭蕉の影響で、諸国を放浪する俳人は数多くいた。まして宗匠ともなれば一門の勢力を拡大するために、諸国を巡って門弟を集めるのが普通であったという。子規はそうした古い体質を批判、革新に乗り出す。近代俳句の黎明期にあって、子規は宗匠の選が絶対であった句会を互いに選び批判する互選方式とした。子規はまた、膨大な量の俳句を季題別に分類して選句眼と論理性を自家菜籠中のものとして俳論を発表し始める。そのなかで、实景を写した句作の面白さに気付き、洋画の技法である「写生」を俳句に導入した。

八一の俳論「蛙面房俳話」の中に「蕪村句考」がある。その中に『春泥発句集』で知られる黒柳召波の句についての意見が「蕪村句考」の一隅に書いてある。下記に紹介する召波の句に対する八一の見解が述べられている。

「山鳥の病妻へだつ炬燵かな」（召波）の一句を雑誌『寶船』の青々君という講者は、上五文字に山鳥のと置いた理由とし次の四つを挙げている。(1)弱く美しき點に於いて山鳥と妻とが相似て居る事 (2)ヤマとヤミとヤの同音にて調子をよくした事 (3)尾の長きより長病の意を含めたる事 (4)炬燵の山の形をなせるより山鳥の山字に要を見たる事。講者は更に付言して、「此等の點より既成の下七五の上へ山鳥のを後から冠られたものである」と云った。

これに対して、八一は上記の「四つの理由は、一つとして当たって居るとは思はれぬのである」と反論している。続けて八一は、「古来山鳥を和歌などに詠み込むには場合が三種ある。第一が其尾の長い故から長しと云う語の助語または縁語に用ゐらるゝ場合。第二が雌雄離れ離れに獨寝をする所から戀の比に用ゐらるゝ場合。第三が雌雄が、山、若しくは谷等を隔てゝ相住んでいるといふ（これも戀の比の格に用ゐらるゝ）場合。先ず主なるものは之れ位であろう。そこで僕は召波の此句の山鳥を此第三の用法に

よったものと思ふのである。この場合の一作例として『万葉集』（第8巻）大伴家持の贈坂上大嬢歌を引用している。家持の時代はまだ通い婚であったのであろう。

「ねもころに 物を思へば 言はむすべ 為むすべもなし 妹
と我れと 手携さはりて 朝には 庭に出で立ち 夕には 床
うち掃ひ 白栲の 袖さし交へて さ寝し夜や 常にありける
あしひきの 山鳥こそば 峰向ひに 妻問ひすといへ うつせ
みの 人なる我れや 何すとか 一日一夜も 離り居て 嘆き
恋ふらむ ここ思へば 胸こそ痛き そこ故に 心なぐやと
高円の 山にも野にも うち行きて 遊び歩けど 花のみ に
ほひてあれば 見るごとに まして偲はゆ いかにして 忘れ
むものぞ 恋といふものを」

（會津八一の引用部分はポールド字体）

「召波の句で云て見れば、病妻と自分と炬燵櫓を隔て居る様子を、山鳥の雄雌が山を隔てて峯向爾婦問するにも似て居ると夫の眼から少しく閨怨を帯びて主観的に叙述したのであろう。」と論破している。要するに八一は「既成の七五へ山鳥を後から冠らせた」という説には根本的に反対していて、この意見の相違は、上五文字に重きを置かぬとより生じたものである、と結論づけている。

また、一茶の句に「思ふ人の側へ割込む炬燵哉」がある。冬の寒さのなかで先を争って足をわり込ませる炬燵には、凍える人間の体温をほぐして、ほんのりとエロスの世界の体熱に変化させてしまう魔力があるようだ。

柿本人麻呂の歌に「足引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む」があるが、マックミラン・ピーターはこれを31行にして英訳した。

(The/long/tail/of/the/copper/pheasant/trails—/drags/on/and/on/
like/this/long/night/in/the/lonely/mountains/where/like/that/bird/
I/too/must/sleep/without/my/love.) これは余滴であるが、先年、外国人としては初めて文化勲章に輝いたドナルド・キーン氏（敬和学園大学名誉文化博士）は、「これは『百人一首』のもっとも卓越した名訳である」と絶賛した。また、蕪村の非在を通して存在を捉えている秀句に、「山鳥の枝踏かゆる夜長かな」がある。

「蛙面房俳話」を味読すれば、八一自身は、神格化された繊細な芭蕉句

より磊落な蕪村句を好んだようである。蕪村の句は写実的ではあるが、実が内面にある理想像を描いたといわれている。蕪村は俳画の創始者でもあり、絵画の世界で提唱されていた「離俗論」を俳諧にもちこんだことでも知られる。世間におもねる気持ちがあれば、俳句の技巧は巧みになっても卑俗に流れる。「俗気を脱する」が俳諧の大道で、自ら信じる美の境地を貫く勇気が必要である、というのである。「月天心貧しき町を通りけり」は蕪村の代表句である。「貧しき町」とは、蕪村が居を構えた京都の下町であるが、彼は市井に身を投じ、俗事に煩わされながらも、心ははるか天空にある満月のような美の境地に遊んだのである。

江戸時代の三大俳人は、松尾芭蕉、与謝蕪村、それに小林一茶である。芭蕉より100年ちかく遅れて蕪村、蕪村より50年遅れての一茶。ちなみに良寛と一茶は同世代人である。芭蕉が生涯に残した俳句は約1,000句、蕪村は約3,000句、一茶はなんと約20,000句を残した。良寛の俳句は100句余り。

芭蕉には、奥の細道の旅の途中で書いた「銀河の序」という小文がある。『奥の細道』では、「鼠ねずの関をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の国市振の関せきに到る。此間九日、暑湿しよしつの労しんに神をなやまし、病おこりて事をしるさず。」とつれない筆の運びである。つまり芭蕉は、この間の9日というものは、道中の暑さと雨の苦勞で気分がすぐれず、病もおこって、道中のことは書かないでしまった、というのである。芭蕉は越後の出雲崎の宿に投宿する。窓を押し開けば、佐渡島は手にとるようにあざやかに見えたであろう。芭蕉は日没後の海を眺めている。佐渡の金山は有名だが流人の島としても知られている。銀河は流人の島への宇宙的な架け橋である。荒磯海の波の音を聞いて旅愁に浸るが、芭蕉の魂が削られるような断腸の思いが込み上げてくる。曾良の随行日記によれば、元禄2年7月4日のこの日は、「夜中、雨強降」と記されている。俳諧の大きなスケールと旅情が溶け込んで、新境地の名吟となった。それから150年遅れての良寛は、縁あって出雲崎生まれ、芭蕉を讃仰した。

窓押開きて暫時の旅愁をいたはらむとするほど、日既に海に沈んで、月ほのくらく、銀河半天にかかりて、星きらきらと冴えたるに、沖のかなたより、波の音しばしばはこびて、たましい削るがごとく、腸はらわたちぎれて、そぞろにかなしびきたれば、草の枕も定まらず、墨の袂たもとにゆえとはなくて、しぼるばかりになむ侍る。

あら海や佐渡に横たふあまの川 （「銀河の序」より）

俳聖・芭蕉は宇宙の創造の基本の力を〈造化〉と呼んだ。造化とは宇宙の原理や構造を暴き出す力のことであり、もっとはっきりいえば〈造化〉と〈神〉とは同義語である。中世隠遁の最高の理念は芭蕉のいうように、「造化一大自然・万有一に従い、造化に帰れ」ということである。芭蕉は出雲崎の宿の窓を開け、〈この世の存在の創り主・神〉を見たのだ。芭蕉の神とは、「あら海」と「佐渡」と「あまの川」という超越的存在の大自然であった。宇宙創成のビックバン（big bang）が起きたとき、「あら海」と「佐渡」と「あまの川」が実現したのであろう。これを目の辺りにして、芭蕉は感激のあまり、我を失って泣くしかなかった。そして「あら海や—」の名吟が生まれた。子規は芭蕉の文学を「雄渾豪壯」の作品と呼んだ。子規の例示する雄渾豪壯の句には「あら海や—」の他に、平泉での吟で「夏草や兵どもの夢の跡」や金沢での吟の「塚も動け我泣声は秋の風」なども含まれる。俳句の革命家である芭蕉や蕪村が正当に評価されるようになったのは、子規のこの「雄渾豪壯」説が出たあとのことである。

蕪村もまた「雄麗艶美」の俳句を完成した俳人であるが、蕪村の芭蕉との違いは、非在を通して存在を捉えたところである。芭蕉は非在を探しもとめ、蕪村は非在に呼ばれた俳人と呼ぶこともできるであろう。この例として、蕪村には、「待人の足音遠き落葉哉」という秀句がある。また、蕪村は、『史記』にみえる史伝をふまえた「易水に葱流るゝ寒さかな」がある。句中の易水は、唐土の河北省を流れる川である。秦の始皇帝の暗殺を企てた荊軻は、「風蕭々として易水寒し、壮子ひとたび去りてまた還らず」と吟じてその決意を述べたとされる話である。その易水に、刺客の張りつめた決意とは何の関係もない葱が川面をぷかぷかと浮いて流れている。蕪村の時空を超えて天翔ける創意の原風景こそ俳諧の諧謔味というべきであろうか。

次に蕪村と會津八一の緊迫感にあふれた2句を比較してみる。

鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉 （蕪村）
 螻蛄の斧に火を見る野分かな （八朔郎）

上記の2句は、初句と中七は違うものの結句は同じである。野分は秋の暴風で台風をさす。蕪村の句の「鳥羽殿」は平安中期に洛南鳥羽の地に造営された離宮であるが、野分について数騎の騎馬武者が鳥羽殿を目指して

駆けて行く。いかなる大事がおこったのか、びんと張りつめた緊張感が走る。彼らが疾駆し去ったあとも疾風はなお吹きまわっている。緊迫感と野分の凄さと照りあっている。特定する典故があるかどうかは不詳であるが、軍記物の一場面を切り取ったような景である。ドナルド・キーン氏は、芭蕉と蕪村の句の特徴は、芭蕉は目前の状景を詠んだのに対し、蕪村は歴史物も取り扱ったことを指摘している。蕪村はわずか17文字の中に、物語を盛り込む技術にもたけていた。物語は実際のものでなく架空のものでよかったのである。

一方、八朔郎の句は、螻蛄の激しい気性が捉えられている。吹きまわる荒々しい野分に向かって、しっかりと草にしがみついている螻蛄が何を思っただけか「螻蛄の斧」をすばやく振りかざす。所詮、螻蛄の斧でしかないのであるが、その一瞬の電光のような緊迫感を「斧に火を見る」とした感覚の把握は見事で新鮮である。季語の分類からすれば、「野分」は秋に属する。螻蛄には緑色または褐色のものがあり、前脚は鎌状をしているので、他の昆虫を捕捉するのに都合がよい。螻蛄は交尾の後、雌は雄を頭から食べてしまうという。激しい気性の虫である。

一茶は国民詩人である。日本人の短詩形文学の中で、もっとも親しまれている俳人であろう。芭蕉は宇宙の造化の構造を、蕪村は宇宙と人間の関係の構造を構築して一家をなしたのに対して、一茶には世界原理の理念は欠如していた。一茶には存在も非在もなく、彼はひたすら愛の讃歌をうたい、愛をもたないものへの怒りの歌をうたった。この俳人にあるのは、人事ひとだけといってよい。故郷は、「古郷ふるやよるも障るも茨はらの花」という句のように人を刺す茨の棘であり、また「死支度致せ致せと桜哉」とうように桜は、死支度を急がせる小道具でしかない。

會津八一には、「俳人一茶の生涯」と「一茶研究眼の変遷」の論文がある。また、田辺聖子には、『ひねくれ一茶』という大部な作品がある。これらを援用して一茶の生涯を辿ってみる。八一は、非情な草木よりも、風土が一茶の性格を形成したことを指摘している。「山里の人によく見る一種の心の淋しさ、一種の根強さと、自然物に親しむ心と、自由を希う心とを、一茶に於いても生得の性格として認められるのです。」と記している。（「俳人一茶の生涯」）

一茶の没後80年に書かれた、八一の「一茶研究眼の変遷」は、秀逸な論文である。春秋庵幹雄の『俳諧名譽談』における一茶の「仏心に志深く」という面や岡田虚心の『俳諧寺一茶』の「嗚呼一茶は超人界を外にし、毀譽得喪は己の関する所にあらずとなす」を引用し、さらに正岡子規

の『俳人一茶』では、一茶の特色を分析すれば、滑稽・風刺・慈愛の3点に帰するとした後に、採るべきは其滑稽のみと断じたのは注意すべきである、と言及する。「子規氏は人も知る如く抒情よりも叙景の俳句を愛した。氏の如く調和と均整とにやかましい批評眼に照されては、一茶の如き猛烈な主観の句は既に俳句の資格を失って居たのであろう。しかし一茶の句は俳句でなくて何であるか、と自分は当時子規氏の評を読むにつけて自ら問うて自ら答へた。俳句でなくとも文学である、しかも頗る貴重なる文学である。子規氏の論にも結局不満足であった。」と書き、八一の尊信する子規の論に異を唱えている。

一茶は宝暦13年、越後境の信州長野の寒村柏原の中百姓の子として生まれた。彼は3歳の時実母と死別する。産みの母の顔も姿も記憶していない。近隣の子供たちは母のない一茶を何かと囃し立てる。「われと来て遊べや親のない雀」(Come with me, / Let's play together, sparrow / Without a mother. trans, by Keene)は一茶6歳の時の句作であるという。その後、8歳の時には継母がやってくるが、この継母と一茶の仲はよいものではなかった。10歳の時に仙六という義弟が生まれ、その子守で大小便にまみれ、ちょっとでも赤子がむずかろうものなら、「わざと泣かしたのだらう」といたぶりかけられる。「…杖の憂目を受くること日に百度、月に千度、一年三百五十九日、目の腫れざることも無かりけり。」と一茶は書いている。小さくてか弱い動物や小鳥に一茶は常に同情を寄せた。そこには、継母のために苦勞を嘗めている彼自身の自己同一化があったものと考えられる。

必然的に一茶はあまり他の子と遊ぶこともなく、ともすると、畑の薪の蔭に隠れて、一日を過ごすような、孤独な子供となっていた。彼を庇護してくれたのは、祖母のかなであるが、その祖母も一茶14歳の年に亡くなり、一茶と継母の不和はどうしようもない所にまで発展した。

一茶は15歳で江戸へ奉公に出された。口減らしのためであったという。好きで嫌いな江戸で、一茶は20年暮らした。それはちょうど、田舎を思う気持ちと同じだ。故郷の風物は懐かしい。恋しくていとわしくて、いとわしくも恋しい。惹かれながらも反駁しないではいられない。古里は太い臍の緒でつながれている。「ふるさとや臍の緒に泣く年のくれ」と詠んだのは、晩年に故郷を訪れた芭蕉であった。荒れ果てた生家には、すでに両親もなく、仏壇に自分の生年月日のついた臍の緒を見つけた時の吟であろう。が、一茶は芭蕉よりももっと現実的な欲望で故郷とつながっていた。一茶が「はつ夢に故郷をみて泪かな」と詠んだころは、まだ彼の親爺

は生きていた。故郷は慕わしいばかりであった。

奉公先を転々とかえながら、20歳を過ぎたころには、一茶は俳句の道をめざすようになった。20代半ばのころ、今日庵元夢こんにちあんげんむの世話になり、執筆役をしていた。俳席に出て、宋匠のそばにいて参会者の句を記入、披露するたいせつな役で、能筆で、俳句がよく分かっている人間でないとな務まらない。今日庵元夢は、菊明きくめい（このころの一茶の俳号）にずいぶん目をかけてくれた。一茶は勉強家で粘り強かった。「信濃の椋鳥、粘りぐらいしか、取り得はありません」と一茶は謙遜した。

田辺聖子『ひねくれ一茶』を援用すれば、当時、ちゃんとした本業をもちながら俳句に手を染め、その方面で名をあげるのを「遊俳ゆうはい」といい、俳句で身を立てる、判者はんじゃでめしを食うのを「業俳ぎょうはい」といった。大の俳句好きであるが、そこらにいくらでもいる凡俳ぼんはい、いうならば俳諧取り巻き連というべきか、そういう人々を「取り俳」といったらよいのか。江戸の俳諧は、めしを食えるのも、あるいはまた、手なぐさみに俳句をたのしんで、それで世間に名をあげるのも、ひとえに、俳句好き、俳句の取り巻き連の層の厚さにあった。「取り俳」のなかには、富裕商人や大町人もいて、一茶を援助してくれる者もいた。

専門俳人（業俳）としての生活は可能ではなかったとしても、挫折と失意の日々が続いた。人間の喜びと悲しみによく共感できた一茶は、俳諧への強い執念をもって生き抜いた人であった。時にふざけることによって、せめてもの救いを求めた、根の深いペシミスト（厭世主義者）であり、また偽悪者ぶったところもあり、スカトロロジー（糞尿露呈趣味）も嫌いではなかったようである。

一茶は、15歳から50歳までは故郷を離れての仮寝の暮らしの身の上であったが50歳の冬、故郷に帰る。文化10年正月、弥太郎（一茶）の申し立ての趣おもむきによれば、「享和元、酉年、親弥五兵衛死去の節、遺言にて、田畑、屋敷、山林譲り請け、その砌、早速引き分け申すべく候ところ、かれこれ延引し、去る文化五、辰年、引き分け相済み申し候。」で始まる「熟談書付の事」がある。こうして遺産問題が片づいたとおもったら、夏に入って一茶の病気と、一福一禍変りばんこにやってきた。「エイヤツと活きた所が秋の暮」。そして明ければ文化11年。一茶はもう52歳になる。

「へアー 四海波風まざりおさまりて/ ともに漕ぎだす宝の舟よ…」長持歌が聞こえてくる。おびたしい提灯をゆらして、花嫁行列の一行は野尻の先の赤川から、夜道を歩いてやってくるのだ。嫁は台所から入り、客たちは座敷からあがる。馬方たちは荷をおろすとき、ひとしきり高らかに「へも

ろた嫁御は福の神」と長持歌をうたう。少しきゃんきゃら（お転婆）だが元気な金びら娘が、一茶の所へ嫁にきた、「鬼次ぼらに添つうて咲はきけり女郎花」。

このようにして一茶は52歳で28歳の常田菊と結婚した。晩婚の初婚である。「老らくや星なればこそ妻迎」、「五十婿天窓をかくす扇かな」、一茶の頭の毛がもう薄くなっていた。やがて長男千太郎、長女おさと、次男石太郎、三男金三郎こんさぶろうと次々に子宝に恵まれるも、いずれも夭折した。長女さとの命名は、郷里の郷であり里であったかもしれないが、疱瘡のため、あっという間に亡くなる。「露の世は露の世ながらさりながら」(The world of dew / Is a world of dew, and yet, / And yet… trans, by Keene) と言って絶句するしかない、まさに空前絶後の名句である。すべては仏さまに任せて、「ともかくもあなた任せのとしの暮」と思うもののいいようのない怨みがましさが心に強く湧きあがってくる。癩もちの妻菊も37歳で早世する。彼女は信濃の野菊のような女であった。わずか8年の間に妻子5人を失ったのだ。一茶自身も浅野へ俳諧行脚に行っているとき、夜道で転んで、中風の発作がおきた。一茶はかねて民間療法には関心をもっており、若い時から諸国を遍歴して、いろいろなことも耳ぶくろに入れている。中風の発作には、医者いしやの薬を飲む前に大根おろしの絞り汁を、当人の汁椀に一杯飲むといい、という。一茶はしばらく湯田中温泉の「湯本館」で養生して、ことなきをえた。「今年から丸まうげぞよ娑婆あそび」、一茶はその句の下に「蘇生坊」とした。

文政7年、ひとりぼっちとなった62歳の一茶は再婚した。飯山藩のご家中の娘で、名前はお雪であった。38歳の嫁を迎える一茶は、橡葉人參なり、碇草なり、強壯滋養の薬草で精をつけ、さらに嫁がくるからといって〈おかうなぎ〉(縞蛇)の串刺しを囲炉裏で焼いて食べた。柏原村の周辺の田圃の田植えの真っ最中に、夜に入ってから花嫁自身は、お歯黒壺を提げ、下男に葛籠ひとつを背負わせてやってきた。わずか数カ月後の一茶の日記には、「八月三日。晴。犬、鱈節一本引ク。雪女離縁」とある。おそらく一茶とそりがあわなかったのは、お雪とは身分の違いもあったのかもしれない。

文政9年、一茶は64歳になっていた。越後二股の百姓の娘のおやおと再々婚した。おやおは32歳であった。おやおは、旅籠屋の下女をしていて、陽気でよく働く娘であった。字は読めない女であったが、記憶力は確かで、一茶の留守をよく守ってくれた。働き者で、金棒引のおしゃべりでもなく、老いた一茶にもやさしかった。

文政10年6月1日、柏原の大半を焼く大火に遭遇して、母屋を焼失した

一茶は、焼け残りの土蔵に移り住んだ。回顧すれば、もともと無一物の人生、無官の狐、ただの野狐であった。一茶は筆をもったまま笑おうとした、「花の世に無官の狐鳴きにけり」。この年の11月19日、一茶は中風により、65歳の貧寒な生涯を閉じた。「又けふも忘れてもどる日陰哉」の一句が、最期の句とされている。一茶のためには、鬼のように彼を苦しみ、心の宿痾であった継母のおさつは、一茶の死を見とどけた翌年に没した。その代わりに一茶の没後、倍もちがう年の再々婚した妻おやおに、父を知らぬ遺児の次女やたが生まれた。

一茶終焉の土蔵は今も残り一茶記念館として観光客を集めている。村山定男著『小林一茶と越後の俳人』には、一茶七世・小林重弥氏の写真掲載がある。

「俳句と短歌は似て非なるもの」であるが、旧制新潟中学時代から有恒学舎の教師時代の八一の情熱は、短歌よりむしろ俳句に傾いていたようである。正岡子規主宰の『ほととぎす』が創刊されると、俳号を八朔郎として、投句するようになった。英語教師として越後に赴任した八一は、明治40年4月には『新潟新聞』の俳句の選者となり、「俳句を募る」という記事に、「県下の俳壇に會津八朔郎を有するは尚ほ中央散文界に夏目漱石を有するが如し。」（『新潟新聞』M.40.5.9付）と書いている。八一は、「地方的特色」「郷土性」を強調して、「越後人は越後人らしき句を詠め」と要求した。それは、越後の大地をしっかりと踏まえた、人間の声の表現への要求でもあった。漱石と自分を比肩してライバル視するなど、自信満々である。八一は、「豊麗の中に閑寂の氣象を蔵し、枯淡の間に雄大の精力を包める勁健の句風を鼓吹せんとす。」と上記の『新潟新聞』に述べている。

また、八一は大学生時代から小林一茶に傾倒していた。かねて一茶の性行と作風について深い同感を抱いていた。頸城に赴任したのを契機に、一茶の研究にも熱心に打ちこんで、新井町の醸造家入村四郎宅から一茶自筆の『六番日記』を見つけた。『一茶句帳』、『一茶句集』、『おらが春』に載せた従来知られている一茶の句は2,400～2,500句であったが、この八一の新発見により、一茶の未公開の句が一気に2,500～2,600句ほど加わり、2倍以上になった。さらに同好会の出版した『七番日記』の6～7,000句を加えると、一万句以上に及んだ。

一茶の故郷の柏原を訪ねると、一茶記念館の入り口には、淡嶋寒月の蛙相撲の画賛に、「瘦蛙負けるな一茶是にあり」という一茶の句に八一が付句して、「次にひかへし會津八朔」と書いてある。瘦蛙一茶より、もっと大物の蝦蟇が後に控えておりますぞ、という自負である。これは瘦蛙への

応援歌でもある。

吉池進『秋艸堂おぼえがき』をひもとけば、秋艸道人・會津八一の言葉として、「一茶の芸術は、小さい貧しいものに対する同情がもとになっている。そして大名とか形式主義とか、権威主義とかに対する反抗を強く現している。そこに一茶の個性が現れている、といったようなことを論じた。」と記述している。さらに道人は、「山に住む者は頑迷固陋で、海に住む者は軽佻浮薄だ。この軽佻浮薄に佐渡をつけて、信州と交換すればちょうどよい。」といったとも書かれている。山に住む農耕民族と一攫千金を狙う狩猟民族を比較した言及であろう。すると、信濃の俳諧寺一茶は「山彦」で、越後の會津秋艸道人は「海彦」とでもいいたかったのであろうか。

一茶の句に「木枯や隣というも越後山」があるように、彼の生れ在所は柏原で、越後境である。前には妙高山、黒姫山、飯綱山が肩を並べ、後には戸隠の絶頂が覗いている。この山々の裾野と、後に聳える斑尾山の裾との縫い目が柏原である。

ドナルド・キーン氏は「一茶の句は、たしかに心に残る。だが、最後には、重い主題をほとんど扱っていないことが気になって、どうしても物足りなさが残る。」(『日本文学の歴史』8近世篇参照)と論述している。初期のころの一茶は、滑稽を本領とする俳人として受け取られていた。一茶は信濃の風光事物などをよく取り扱い、苦しむ人々への共感をも表現できたはずではあるが、ついに社会と真剣に取り組むことをしなかった。そもそも俳諧というものは、浅間山の大噴火やその他の天変地異などの悲劇的描写には不適切であることを一茶は承知していたのかも知れない。

良寛と一茶の類似句について

清貧な良寛の句と貧寒な一茶の句とに類似句があることはよく知られている。一茶は、良寛より5年遅れて誕生し、4年早く他界した。この二人は、65年間も同時代人として生きた。しかも晩年は、良寛は越後の国上山などに、一茶は信濃の柏原に、30年間も国を隣にしてひとつ世に生きていた。二人が互いに何らかの影響を受けた、と考える方がむしろ自然の流れであろう。

焚くほどは風が持てくる落ち葉かな (良寛)

焚くほどは風がくれたる落ち葉哉 (一茶)

文政2年(1819)7月15日、長岡藩主・牧野忠精が、良寛を城下に迎

えようとして、山駕籠に乗って良寛の庵を訪ねたが、良寛は発句を示して断ったという。その時の発句が「焚くほどは風が持ってくる落ち葉かな」だという。あるいはこの発句より、良寛の人生哲学を示す漢詩を差し示した方が状況にふさわしかったのではないか、と筆者は考えたりする。これにより良寛の心中を察し藩主は、「身をいとえよ」といって山をおりた。あとで「見わたせば山ばかりなる五合庵」の一句を詠んだが、庵から見えるのは山ばかりで、良寛の姿も心もなかった、といたいのであろう。

雑誌『大法輪』(2009.9)に連載中の立松和平作『小説 良寛』(33)によれば、藩主・牧野忠精は、金糸で縫い取りをした羽織を着た姿で籠から降りて、「良寛どのか。御無礼とは知りながら、長岡城下の寺院にお迎えしたいと願ってまいりました」と挨拶した。藩主のていねいな物腰に、良寛も感銘を受けないわけではなかった。だが良寛は依頼を断る以上、沈黙によってするのが最大の礼であると考え、ひとことも言葉を発しなかった。忠精は、「良寛どの、我が祖先が建立した寺の住持和尚にお招きしたいとは、私の我が儘に過ぎません。俗人の私ごときがあれこれ申しあげるようなお方ではございません。どうも失礼つかまつりました。御身を御大切に、御修行にお励みくださいますよう」といって山を降りていった。

もともと国上は、村上藩主・内藤忠敦の支配地であったので、村上藩の許可をもらって、まず牧野家の家臣・池田兵左衛門が3月に良寛を訪ねてくる。池田は殿様の命令なので夜まで粘ったが、良寛は「承知」とは言わない。牧野忠精は徳川幕府の老中であり、すぐれた漢詩や和歌、俳句も作った文化人であった。良寛の清らかな心や豊かな学問の力を知って、牧野は長岡に学舎をつくり、良寛にその学舎主に任命しようと考えたのだともいわれている。また長岡に寺を建立して、良寛に住職として入ってもらいたいと考えた、という逸話もある。いずれにしても良寛が長岡の町に移り住めば、彼は地位や名誉や財産などすべてを手中にできたであろうが、そういうものは心をくもらせるものだとして、求めようとはしなかったのである。

ついでながら、良寛と日本の21世紀の間には、五七五の音律と季語と切字その他の約束事の外に出る自由律俳句が出現した。種田山頭火は自由律俳句作者の代表格のひとりである。彼はのちに仏門に入り、漂泊の旅にでた僧侶であった。人間との交感はなく孤独であったが、山頭火と自然との間には、ぬくもりのある風の行き交う交感があったようだ。筆者が五合庵を訪れるたびに、彼の自在闊達な代表句「分け入っても分け入っても青い山」が髣髴として浮かんでくる。

前記の一茶の句は、『七番日記』にみえるのだが、文化12年10月の入集

である。文化12年といえ、良寛は58歳の時であり、良寛が長岡藩主・牧野忠精の訪問を受けたのは、文政2年の良寛62歳の時である。瞩目すべきは、一茶の俳句は、良寛の俳句に4年先行するという事実である。一茶は自分の生き抜いた苛烈な人生を反映して、個性的で鮮烈な人生詩を詠んだ俳人である。良寛と一茶の年齢差は数歳にすぎない。良寛は越後で、わずかに遅れて一茶は信州で呱呱の声をあげた。良寛と一茶は、江戸時代の後期の65年間も重なる同時代人であるが、没年は一茶のほうが数年早い。

宋 左近著『小林一茶』では、この一茶の俳句の評釈として、次のようにコメントしている。「今日の仕事も終わりました。『おち葉』を『風』が運んできます。それに火をつけて、焚火をします。少ない落葉、小さい焚火。少ない生涯の年数、小さい生命の火。運んできてくれた風。焔をあげて燃えてくれる落葉。幸福が明るんで、そこに息づいています。」

會津八一は、「蛙面房俳話」七 俳句の類似の中で、「古人同志、今人同志、又は古人今人間に、往々句の類似を見る事がある。」として、1. 剽窃より来る類似、2. 不注意から生ずる類似、3. 模倣より来る類似、4. 翻案よりの類似、5. 暗号、6. 誤伝誤写等により出来た類似、の計6種を挙げている。

特筆すべきは、5. 暗号で、「これは全くの暗号でこれもまゝある事で左程珍くも無い。」として、「湖の水もまさるや五月雨さつきあめ」（許六）と「湖の水まさりけり五月雨さつきあめ」（去來）を暗号の例文として載せている。八一は続けて、「つまり同時代人、同趣味の人、同流の人之間などに自然に此類似を来すのは必ずしも無理もないことで、それも長篇のものなら格別、十七字の短詩形である上は免れ難い処であろう。」と論述している。

注目すべきは、八一の「暗号」という言葉であるが、同時代人の暗号としての「焚くほどは」→「風」→「落ち葉」などは説得力がある。良寛は諸国行脚のあと越後の国上の山に定住した。一茶は根無草になる恐れをひしひしと感じていた人のようで、郷里の柏原に帰って百姓になった。越後や信濃の大自然の中での良寛、一茶という二人の俳人の名吟における暗号の一致は、ごく自然の流れである、と結論づけるべきであろうと思われる。

蕪村の句「釣鐘に止まりて眠る胡蝶かな」たいして、子規は「釣鐘に止まりて光る蛍かな」と書いた。これは剽窃というようなことではなくて、子規はむしろ彼の俳句を読むものが当然、蕪村の句を知っていて、この洗練された玄人層が自分の感受性に従って蕪村の句に加えた子規流の修正を珍重することを期待したのである。

小林一茶の秀句・私選12吟

一茶の生涯は、波乱と苦悩に満ちたものであったがために、一茶には人間味にあふれた句があるのだと考えている。一茶の思想が深刻でないこと、裸の人間が出ていること、だれにでも理解できるような即物的なりアリズムなどの一茶の俳句が外国にも広がっているという。普遍性と通俗性のある一茶の句境を喜ぶ諸外国のこれからの俳人が師と仰ぐのは、芭蕉や蕪村ではなくて一茶ではないか、と予測される。周知のように、一茶の開いた俳句の道が、昭和以降の川柳とつながり、さらに自由律俳句に流れて新しい伝統となった。

1. 花の雨ことしも罪をつくりけり
2. ちる桜けふもむちゃくちゃくらしけり
3. 人を吐くように居て鳴く蛙すわつ
4. 時鳥なけなけ一茶是に有りほととぎす
5. 娘見よ身を売れつゝ行蛭うら
6. やれ打つな蠅が手をすり足をする
7. 青空に指で字をかく秋の暮
8. 名月や膳に這寄る子があらばはひ
9. 恋人をかくした芒かれにけりすすき
10. 猫の子がちょいと押へるおち葉哉
11. 大根引大根で道を教へけりだいこんひき
12. 是がまあつひの栖か雪五尺

〈評釈〉

1. 春爛漫の頃、桜の花が人々を招きよせて呈示するのは、陽ではなくて陰の世界で、死の匂いたつ境地のようである。梶井基次郎が『桜の樹の下には』で、桜は死の花であると定義したが、江戸時代の一茶もそのように考えていた。いったい俳諧に「罪」という言葉が使われはじめたのは、いつ頃からであろうか。蕪村と同時代人で京島原に住んだ太祇たいぎの恋句に「蚊帳ぐる女は髪に罪深し」などがある。が、「人のなす罪」の句について、一茶はたびたびつくらないではいられなかった、彼の心の疼きに注目したい。
2. 月と桜の歌人といわれた西行法師の和歌に「願はくは花の下にて春死なんそのきさらぎのもち月の頃」があり、良寛の句に「同じくば花の下にて一とよ寝む」がある。また、良寛の辞世にも「散る桜 残る

桜も「散る桜」がある。桜はいさぎよく散り、いわば死に上手な花である。桜の季節は、一茶の心も落ち着かないのである。

3. 鳥羽僧正覚猷の描く『鳥獸戯画』では蛙相撲の画がある。蛙が天を仰いでエネルギーに一齐になく情景はよく見られたであろう。一茶の生きた時代は、人間と蛙が濃密な共生関係にあった。すると一茶の幻想は膨らんで、蛙が喉元まで開けてどっしり座っているのは、これからまさに人間を吐き出そうとしているのではないか、と。紀貫之は、「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声をきけば、生とし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」といった。これによって蛙と鶯は、歌にうたわれる生きものの代表選手となったのである。

①「瘦蛙負けるな一茶是にあり」、②「我を見て苦い顔する蛙かな」の両句をドナルド・キーン氏の名訳で披露すると、

①Skinny frog

Don't get discouraged:

Issa is here.

②When he looks at me

What a sour of face he makes,

That frog over there!

4. 一茶には「我汝待つこと久し時鳥」の一句もある。ああ、ほととぎすが鳴いているよ、いいね、もっと鳴けよ、と身をのりだしている一茶の様子が伺える。新潟西海岸でも松籟をわたる風が爽やかな5月下旬から6月にかけて、郭公の鳴き声に耳にする。良寛の和歌に「国上山松風涼し 越えくれば やま蜀魂 遠路近路に鳴く」がある。国上山の松籟をわたる風は爽やかで涼しい。その坂道を越えてくれば、山に棲むホトトギスがあちこちでしきりに鳴いている。五合庵に帰れば、蜀魂も良寛を歓迎しているようだ。
5. 一茶の青年時代には、信州の農村は何度も飢饉に襲われた。死人の腐肉を喰う野犬も徘徊していたという。そのたびごとに農村の娘たちは町の娼家に売られ、苦界に身を沈めたものも多かったという。一茶は、今捕まって、美しい光を放ち「身売られつゝ行螢」と商売の道具となって売られて行く娘と重ねている。薄幸な娘たちへの一茶流の応援歌である。

6. Hey! don't swat him!

The fly rubs his hands, rubs his feet

Begging for mercy. (trans. by Keene)

江戸時代にあっても、夏は解放される季節である。一茶は小鳥や小動物、昆虫、植物にいたるまで、さまざまな自然物と心を交わしている。その交感から生まれる彼の俳句には、人間的な温もりが感じられる。一茶は人間至上主義的の俳人と呼んでよい。ドナルド・キーン氏は「彼が後代の人々の間に独特の人気を持つようになった理由は、非常に個性的でまったく銜てらいのない句を、それも、とくに自らの貧乏、あるいは小動物や虫への愛情をテーマにつくっているからであろう」と記述している。（『日本の文学の歴史』8近世篇参照）一茶は素朴な句風や故郷である信濃の風光事物をとりあげて詠んだことで知られている。

7. 江戸時代の俳人の中で、一茶には一番おおくの「青空」をテーマにした句作があるという。農作業中に背を伸ばしてみる澄みきった青空の美しさは格別である。当時、紙は貴重品であったので、良寛も空に向かって「空中文字」を書いた、といわれている。
8. 膳に這いよる子は、一茶の愛娘さとのことを指しているか。しかし、物心のつくかつかないかの2歳で夭折してしまう。たった一人ぼっちで見たところで、名月ではない、と一茶は嘆いている。「膝の児ゆびさしはじめの花」には、梅の花にたいする強い驚嘆の心情がある。
9. 「恋人をかくした芒」、それが季節は移り今では枯れてしまった。それだけの句であるが、芒が枯れてまる見えになった芒が原にもう恋人の姿は見えない、遠くへ去ってしまったのだ、という実感が原風景の中に見えてくる。
10. 庭先に落ち葉が吹き寄せられている。走り出た仔猫が一枚の落ち葉をちょいと押さえて、また離す。またちょいと押さえる。猫の子が遊んでいるのか、それとも落ち葉が遊んでいるのか。このようにして仔猫は、鼠などの小動物を捕獲する学習をするのであろうか。家猫として可愛がられるための準備期間か。ほのぼのとした晩秋の田舎の景。
11. 手ではなく、土の匂う大根で道を指し示した、というのが面白い。長閑な農村風景が彷彿と浮かび上がってくる。また、「大根引一本づつに雲を見る」もある。百姓仕事は重労働である。痛む腰をのぼして空に浮かんだ雲を見るのも一服の清涼剤である。
12. 一茶は雪深い信濃で生まれ、雪深い中の生活こそこの俳人の住居であり、またそのまま墓所ともなった。雪を抜きにして、この俳人は存在しない。雪はあまりにも身近にあって、客観化できなかつたのか、雪の名句は意外と少ない。しかし、これは一茶の代表句である。

良寛の俳句と會津八朔郎の俳句

「一人立ち我が俳諧を観ずれば上手でもなし下手でもなし」と八一は言っているが、良寛も和歌や漢詩と比べて俳句の評価は低いようである。

良寛の父の以南（俳号）は、「北越蕉風の棟梁」といわれ、かなり知られた俳人である。一茶は以南のことを知っている、という記録を残しているが、二人が直接膝を交えて談笑した、という記録はない。しかし、良寛の俳句には、以南の句柄の影響はほとんど見られない。むしろ一茶調ともいえる一茶の生活詩的影響はかなり見られる。

「芭蕉を俳聖とするならば、一茶は俳人というべきであり、良寛は他の芸術同様、枷のない無為の境地において俳句を楽しんだ俳遊である。芸術一路に、芭蕉は聖たらんとして苦しみ、一茶は人間たらんとして悩みに徹し、俳諧人でない良寛は自由闊達に俳句と遊んだ。芭蕉が「永遠の旅人」としたら、一茶は「永遠の野人」であり、良寛は「永遠の自然人」といえないだろうか。」と村山砂田男氏は論述している。（『良寛のウイットー俳句のある風景』参照）

良寛の俳句は107句が残っているが、漢詩700余首、和歌1,400首に比べて圧倒的に少ない。ちなみに良寛逸話は、現在600ほど残されている。良寛は日本の漢詩人の中では最高峰に位置する。また良寛の和歌もさることながら、長歌の素晴らしさは柿本人麻呂に匹敵するとすらいわれている。が、俳句は句数の少ないせいもあり、その評価もおおきく分かれている。良寛の漢詩には人生哲学的な「まこと」が、和歌には抒情的な「まごころ」が表現されている。良寛の俳句は「まほろば」的即興性が特徴であろう。（筆者はこれらを3Mとよんでいる。）また良寛句には「心のゆとり」、「諧謔味」、「宗教的教訓」、「歴跡への感懐」などがみられる。良寛は古典を背景にした句も多いが、日本では芭蕉の影響が大きい。また中国では『論語』に見られる孔子やその弟子の顔回を題材とした俳句もみられる。

良寛の句は平明であり素直である。平明であるからして共感を呼びやすい。また素直であるからして、そこにはまやかしが無い。通俗的な醜悪さが無いのである。どの俳句をとりあげても醜さを超越した秀囲気があり、口ずさんで快いものばかりである。

良寛句の即興性

良寛句における即興的特徴という観点から、良寛の書簡を見てみると、現在伝わっている267通の書簡の約30パーセントにあたる81通に、詩歌や俳句を書き添えている。その中の俳句は、下記の5通だけである。

手もたゆくあふぐ扇の置きどころ (阿部定珍宛、7月3日付)
 萩すすきわが行道ゆくみちのしるべせよ (宛先不明、9月付)
 秋風のさわぐ夕ゆふとなりよにけり (兵藏宛、7月22日付)
 柴焼たきて時雨とき聞夜きことなりよにけり (解良叔門宛、10月5日付)
 疑うたがふな六出むつでの花はなも法のりの色 (斎藤源右衛門、12月朔日付)

玉木礼吉著『良寛全集』の中の阿部定珍に与えた「手簡」によれば、
 「見事なる茄子みやうが並盆酒たまはり恭しく納受仕候先日の御うた別な
 事にておもひつかず候間此者につかはし可被下候

秋もやゝ涼しく成りければ

手もたゆくあふく扇のおきところ」とある。

国上山の山麓に住む良寛に、書簡をもって訪ねてきた使いの者を待たせ
 て、短い返事を書き、最後に俳句を書き添えている。時間的なゆとりがあ
 る場合は書簡に漢詩をしたため、俳句の場合はゆとりのない場合であつ
 た、と考えられる。時間的な制約から、俳句は即興的な句詠となり、推敲
 する時間なかった、と思われる。まさに即吟。良寛の父親の以南は、その
 俳句を練りに練って、重厚性を出しているが、良寛にはそのような傾向は
 みられない。良寛の俳句の句作の年代を辿ることは困難である。良寛の俳
 句には、ほとんど推敲のあとはなく、それだけに自由な発想によって句詠
 されており、かえって面白みがあるといえよう。

原田じゆくさい鶴齋の家で句作されたとされる3句に下記のようなものがある。

夢覚まきて聞きば蛙とのおの遠音かな哉
 風鈴ふうりんや竹たけを去事さるごと三四尺
 誰たれきけと真菰まきが原はらのぎゃぎゃし

原田家の近くには、潟があり、水辺には葦や真菰が群生していたと思わ
 れる。また民家の周辺には、田畑が広がり、蛙の大合唱も聞かれたであろ
 う。第1句では、夜も更けたときの情景で、蛙の声も薄れている。第2句
 の「風鈴」は原田家のもので、当時富裕の家でしか用いられなかった。風
 鈴の爽やかな音に耳を傾けながら、二人は大好きな酒を酌み交わしていた
 か。第3句の句意は、真菰が原に鳴くよしきりは、誰に聞いてもらいたい
 と思って、しきりに鳴いているのだろうか、というほどの意味である。芭
 蕉の『嵯峨日記』には、「能なしの寝たし我をぎょうぎょうし」がある。特
 筆すべきは、3句とも良寛の「聴覚」、つまり「音」を感じる感覚に関する

興味である。蛙、風鈴、行々子などは、いかにも俳句的であり、それぞれの語によって、句の眼目が定まっている。また自然諷詠の実感として、句の評価を高めている良寛の句詠に「鍋みがく音にまぎるる雨蛙」や「山里は蛙の声となりけり」がある。

涼しさや鐘を離るる鐘の声 (蕪村)

風鈴ふうれいや竹を去る事三四尺 (良寛)

上記の2句を比較してみると、蕪村句では、夏のさわやかな朝に蕪村は鐘をつく。鐘の音は、透明な朝の大気の中へと広がっていく。蕪村の実生活は貧乏と家庭悲劇という逆境に襲われていた。良寛句では、風鈴の音色と青竹の色との聴覚と視覚とが相まってすがすがしい効果をだしている。蕪村も良寛もこのような句材、このような句境こそ俳諧の領域であると信じたものであった。貧寒な蕪村、清貧な良寛にとっては俳諧そのものが光明であった。現実世界からの逃避先として、感覚世界に遊ぶことに俳諧の慰めを求めたのであろう。

良寛句の視点（諧謔性と心のゆとり）

115年の時を隔てて、正岡子規の幻の俳句選集『なじみ集』が古書店で見つかった。明治27年（1894）頃の成立と推定されるというから、子規が病臥する以前の頃で、子規の元気な鼓動まで伝わってくるように思える。この中から子規の滑稽味をにじませた3句を下記に紹介する。

- ① 秋に形あらばへちまやこれならん
- ② 馬士一人馬にひかるゝかれ野かな
- ③ しにゝ行くためにめしくふこじき哉

「秋に形」の句は、「秋に形あらば糸瓜へちまに似たるべし」の異形句。

「馬士一人」の句は、主客転倒の面白さがある。乗馬用ではなく、商売用の馬に馬子が引かれてとぼとぼ家路を辿る景は滑稽でもあり、また哀れでもある。

子規の門人・佐藤紅緑が「余のはじめて俳句を学ぶに第一に注入せられたのは滑稽思想」といっているが、子規の滑稽（笑い）への関心に注目すべきである。芭蕉句にも「冬の日や馬上に凍る影法師」があり、良寛にも「木枯を馬上ににらむ男かな」が残されている。馬上の人物は、逆境を前

にして敢然と挑む気迫を示したもので、客観視された芭蕉なり、良寛なりの姿であり、これらの句には滑稽味はまったくみられない。また會津八朔郎の句に「馬の背に入りのこる日や秋の風」がある。この句の寂寥感が、季語の「秋風」ともよく融合していて、八朔郎の秀句のひとつに数えてもよいであろう。芭蕉の「あかあかと日は難面も秋の風」の句にどこか似かよう雰囲気がある。

「しにゝ行く」の句は、「寒山拾得賛」の前書にある。寒山と拾得は唐代の禅僧で奇矯な行動で知られている。良寛詩は寒山詩の影響を受けている。子規の親友漱石にも「寒山か拾得か蜂に螫されしは」の句が残っている。また漱石は、「良寛に手毬つかせん日永哉」を残しているが、いずれも名句とは言い難い。(俳文学者・復本一郎氏の記事「子規『幻の選句集』発見」(09.9.24) 参照)

良寛の名吟とされる「盗人にとり残されし窓の月」は、西郡久吾著『北越偉人 沙門良寛全伝』にも、解良栄重著『良寛禅師奇話』にも類似のエピソードは出てくる。しかし後者には俳句は付いていない。仏教では月は仏の象徴とみなされることがある。盗人は良寛の蒲団を持ち去ったが、心の支柱ともいうべき月だけは残していつてくれた。その月が拝めるだけで満足だ、と良寛はいうのである。心のゆとりと満足感にこの句の価値がある。

また西郡久吾著『北越偉人 沙門良寛全伝』には、「雨のふる日はあわれなりけり良寛坊」の逸話も語られている。寺泊町の外山家には、良寛の妹むらが嫁いでいたから、帰りを急いだり、遠慮することもなかったであろうが、「禅師は書跡のため数々幽閉の厄に会ふ人なりけり」と西郡は書いている。たまたま雨天の日に托鉢に出た良寛は、外山家の座敷に上げられて歓待を受け、筆墨と一箱の白扇とを供され、書くまで家外に出ることを禁じられた。困り果てた良寛は、一箱の扇子のこごとく「雨のふる日はあわれなりけり良寛坊」と書いてしまった、というのである。これが良寛一流の諧謔であり冗談である。良寛のユーモアと遊び心であふれている。心のゆとりから生まれたこの句には、じめじめした暗さはない。これは、接待をうけ、戸をすべて閉めた外山家の策略に同調しただけの良寛のジョークといえよう。

次に玉木礼吉著『良寛全集』には、下記のような挿話がある。

「出雲崎関川萬助、和歌を好み、禅師を景慕し、禅師も亦た能く萬老を愛す、故に禅師の書を得むと欲するもの多く紙箋を萬老に托す」(p.296) ではじまる。秋晴れのある日、萬助は裏の畑で柿もぎをしていた。そこへ

良寛が飄然として現れた。萬助は師を喜んで迎え、良寛の方から囲碁をしないかともちかけた。萬助は勝者がしかるべきものを得る、いわゆる賭碁を提案した。玉木本には、「師曰く時漸く寒し願くば一裘を與へよ」とある。また師に利あらず時は、「願くば師の書を以てせよ」と萬助はせまった。もともと萬助のほうが囲碁の腕前は上で、たちまち良寛はうち負かされ、萬助から揮毫を促される。良寛は一扇子をとり「柿もぎの金玉寒し秋の風」と書いた。良寛は卑俗な「金玉」を出して、諧謔味をもろうとした。萬助はこの狂句に近い句を見て、聊か喜ばなかった。再局も萬助が勝ち、さらに一局を挑むも良寛の負け。良寛は三度負け、三たび同じ「柿もぎの一」の句を書いた。「師曰く老が三たび書を責むるもの同じくこれ棋の勝の為なり、余が三たび同句を以て之に酬ふるも、亦た可ならずやと呵々大笑するのみ」、と記述されている。

関川萬助は歌人であり、回船問屋を生業としていた。まじめな人柄で冗談を好むタイプではなかったようだ。そういう生真面目な萬助を良寛は半ばからかって、和歌ではなくて、即興的な俳句を詠んでいるところに面白味がある。

谷川敏朗著『校注 良寛全句集』には、この句は「入浴中の源義朝を急襲した場面の川柳『金玉をつかめつかめと長田下知』に近く狂句というべきで、後人の創作らしい」と結論づけている。余滴ではあるが、「屋根引の金玉しぼむ秋の風」がある。冷たい秋風の吹く中で、人が屋根の上で萱を葺いている。本句の眼目は、人間良寛の逸話にふさわしい、戯れ心からくる愉快さにある、と解釈することもできようが、諧謔を一歩越えて「しぼむ」の語に同情の思いを寄せていることも忘れてはならない。良寛は人々に対して常に温かい眼差しを向けていた。

芭蕉句の影響

平安時代には和歌には、人々の魂をゆさぶる力があると信じられていた。この神秘的な靈力を「言靈」と表現した。「俳諧」の語は元来「滑稽」を意味する中国語である。機知滑稽を主とする連歌は、江戸時代には庶民の文学として普及し、江戸時代の文学の重要なジャンルとなった。

ノーベル文学賞候補にもなった魚沼出身の詩人・西脇順三郎は、俳句はウイト (wit) の芸術であり、エニグマ (enigma) だ、ともいっている。俳句は諧謔であり、謎である、と詩人は俳句の真髓を語っているのだ。良寛はその詩歌と書の芸術から、実にユーモアの少ない人だったと言われている。が、そのユーモア意識の全くないところの大まじめさからの

句詠には、かえって良寛の豊かなユーモアを感じとることができる。

良寛の生家である山本家には48点、父親以南の蔵書は81点を数えるという。そのうち良寛が閲覧した可能性のある本は、『奥の細道』（芭蕉）、『俳諧十論』（支考）、『去来抄』（去来）、『句兄弟』（其角）、『芭蕉句撰』（華雀）など53点。この中でも芭蕉、其角の作品にはよく目を通したと思われる。

以南は俳諧の才能が豊かで、生涯に161句を残している。ところが良寛の俳句には、以南の句柄の影響はほとんど見られない。良寛句に目立つのは一茶調であり、崇仰した芭蕉の俳境さえ垣間見せている、といっても過言ではないであろう。良寛も父親の以南と同様に芭蕉の句を高く評価していたようである。

良寛遺墨の中にも「ふる池や蛙かわずとびこむ水のおと」などの芭蕉の句が含まれている。この名吟は、芭蕉自身の作風の展開（談林俳諧から蕉風俳諧にいたる転機）のうえで、芭蕉開眼の句としてもあまりにも有名である。

芭蕉のこの名吟は、1682年の3月末に成った。が、各務支考の『葛の松原』（1692）に見られる有名な裏話によれば、最初まず「蛙飛びこむ水の音」だけが出来、そのとき芭蕉の傍らにいた其角が「山吹や」と上5を冠したといわれている。池のほわりには、実際に山吹が咲き乱れていたかもしれず、視覚的にも鮮やかである。古歌にも蛙と山吹の取り合わせはあり、決して悪くはない。しかし、「山吹」には、「古池」のような永遠性は欠如している。

芭蕉の研究者でもあるドナルド・キーン氏は、「芭蕉の名句の多くは、永遠なるものと瞬間的なものを同時にからめとっている。この場合、古池はその永遠なるものであるが、人間が永遠を知覚するためには、それをかき乱す一瞬がなければならない。蛙の跳躍、その一瞬の合図となった「水の音」は、俳諧における「今」である。しかし、「今」が感知された瞬間に、古池は再びもとの永遠に戻っている」と論述している。永遠を「今ここに」ある人間に知覚させる一瞬の乱れ……この句には絶対無比の響きがある。芭蕉は、俳句は詩の本領である恒久的に美しい効果を収めることを狙うのみならず、新鮮でなければならない、と主張した。

芭蕉は弟子たちに、彼の詩風を支えている二つの原理は変化と不易であると語っている。もっとも有名な視覚的あるいは聴覚的な映像を映し出している「古池や一」の句の第一節で芭蕉は、「この詩で不易の要素をなしている時間を超越して動かない池を出している。次の一節の蛙が瞬間的なもので、この二つが水の音という一点で交っている。もっと方式通りに解

釈すれば、この詩で不易の部分は無数の日本の詩でその主題をなしている真理の認識であり、芭蕉の寄与は、それまでに何度も詩で用いられて来た蛙の鳴き声でなしに、その跳躍を詩に使ったことにあった。」俳句には、必ず二つの要素を含んでいなければならないで、それが普通は切字と呼ばれている言葉で分けられている。「俳句が有効であるためにはそういう電極に似たものが二つあって、その間で火花が散ることが要求されている。」とキーン氏は論述している。(キーン著『日本の文学』参照)

この句は禅宗の哲学の影響をみることも許されよう。厳しい戒律を守り、経典を熟読することよりも、むしろ突然の直覚を通して悟が開けるというようなことも含まれている。一切の基本である虚無について考えながら、長時間にわたって座禅をしていると、不意に背後から警策で肩を叩かれることがあって、もし悟が開かれるものならば、その時なのである。ジェームズ・ジョイスの短編小説にでてくるエピファニイ（突然の顕現）と同じような体験を指すものであろう。

芭蕉句に先行する句であるようであるが、「鯉はねて水静也郭公^{なりほととぎす}」（言水）がある。芭蕉の有名な「古池や一」の句とあまりにも情景が似ているので、つい比べてみたくなる句ではある。言水の体験を見事に踏まえた秀句の自註には、さびわたるこの里でホトトギスを待っていると、そうではなく里鯉のはねる音を聞く。「いやましに淋し。はたして時鳥なりけり。」とある。

『古今和歌集』（20巻）の仮名序で紀貫之が、「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける」と記した。蛙の声を賛美することが日本的な美意識となった感がある。芭蕉句では、蛙の声ではなくて「水の音」に重点をおいて俳諧とした。まさに「音で静寂を聞く」という、アイロニカルなレトリック（ironical rhetoric）である。良寛句の「新池や蛙とびこむ音もなし」は、芭蕉句の「ふる池や一」をもじって、「古池」を「新池」に反転して諧謔見を出そうと狙ったものであろう。静寂を「音で静寂」を聞こうにもその音すらも無い世界なのである。

では、古池に飛び込んだ蛙は何匹であるか。東洋人であるなら誰でもそれは、「一匹じゃよ」と答えるであろう。が、*One Hundred Frogs* by Hiroaki Sato (1995) という袖珍本には、正岡子規、新渡戸稲造、斎藤秀三郎をはじめ欧米の諸家によるこの芭蕉の句の英訳を収めてある。この本には、小泉八雲（Lafcadio Hearn）は、次のように複数形で訳しているのは驚きである。では正岡子規とドナルド・キーン訳も併記しておく。

Old pond—frogs jumped in—sound of water. (L. Hearn)
 Old pond!—the noise of the jumping frog. (S. Masaoka)
 The ancient pond—a frog jumps in—the sound of the water.
 (D. Keene)

八雲は動詞の過去形を使い、キーン氏は現在形を使っている。子規子は動詞を省略している。また上記の英訳本で蛙を複数形で英訳した学者は、八雲を含めて、たった2名にすぎないことも付記しておきたい。

良寛と交友のあった江戸の書家・亀田鵬斎は、画賛に「古池やその後とびこむ蛙なし」と賛をしたという。また川柳に「音のした池へ翁の影うつり」があるが、上記の2句よりも良寛句のほうが、さらに何回転かさせた面白みがある。

秋深き隣は何をする人ぞ (芭蕉)
 ゆく秋のあはれを誰にかたらまし (良寛)

次に上記の芭蕉と良寛の句を比較してみよう。芭蕉句の意味は、しだいに深まりゆく秋の静寂さの中にあって、隣家の人は沈黙の世界の住人であり、その人は誰なのか、何をする人か、一体どんな人なのか、会って語ってみたい気持ちに駆られた芭蕉の孤独感が漂っている。良寛句でも、越後の厳しい冬を迎える前の晩秋のひしひしと迫ってくる寂しさが漂っている。良寛句にも芭蕉のさびしさに通底する、きびしい芭蕉的な世界を垣間見ることはできまいか。たとえ表層的な理解であったにしても、良寛の意識の底には、芭蕉の影が見えるような気がする。

参考までに、下記に芭蕉句、蕪村句と良寛句の類似句を併記しておきたい。

よそはでも顔は白いぞ嫁が君 (良寛)
 餅花やかざしにさせる嫁が君 (芭蕉)

真昼中ほろりほろりと芥子げしの花 (良寛)
 白芥子や時雨の花の咲つらん (芭蕉)

鳩におの巢のところがへする五月雨さつきあめ (良寛)
 五月雨に鳩の浮き巢を見に行かむ (芭蕉)

留守の戸に独り淋しき散り松葉 (良寛)

るすにきて梅さへよそのかきほかな (芭蕉)

秋風に独り立たる姿かな (良寛)

野ざらしを心に風のしむ身かな (芭蕉)

いざさらば我も返らん秋の暮れ (良寛)

此の道や行く人なしに秋の暮れ (芭蕉)

いくつれか鷺の飛びゆく秋の暮れ (良寛)

門もんを出いづれば我も行く人秋の暮れ (蕪村)

門いを出いでて故人あひに逢ぬ秋の暮れ (蕪村)

我をしたふ女やはある秋のくれ (蕪村)

初時兩名もなき山のおもしろき (良寛)

春なれや名もなき山の薄霞 (芭蕉)

仏教語を使った良寛句

良寛は曹洞宗の僧侶である。安永8年(1779)に備中玉島から来た国仙禅師について円通寺に入った。この禅寺では、座禅を中心とした教えに加えて、自給自足のためのわざを重んじた。この頃の円通寺は、座禅と共に木魚を叩き鉦を鳴らしながら「南無阿弥陀仏」の念仏を唱えるという、いわば自力と他力を兼修する教義であったという。隠元和尚のおうぼくぜん黄檗禅の影響を受けていたらしい。良寛は、開祖道元禅師の『正法眼蔵』をはじめ数々の経典などを学び、それらを自家薬籠中のもとした。良寛句の中に仏教語が入ったものがあっても不思議ではない。

1. 「蘇迷廬」 蘇迷廬の訪れ告げよ夜の雁
2. 「法の色」 疑うたがふな六出むつの花も法のりの色
3. 「鉢叩き」 鉢叩き鉢叩き昔も今も鉢叩き
4. 「菩提の花」 幾重ある菩提の花を数へみよ
5. 「摩頂して」 摩頂まちょうして独り立ちたけり秋の風

「蘇迷廬」は、仏教上の世界の中心にある山。帝釈天の居城がるとされる。次に「法の色」は、仏法の色、つまり仏の教えの色のこと。六出は雪

のことで、六花ともいう。「鉢叩き」は、陰暦11月13日の空也忌から徐夜まで、鉄鉢を叩き、瓢箪や鉦を鳴らし、念仏を唱え踊り歩いて托鉢をすること。またその人。鉄叩きの寒行の声は、ものの哀れを誘うものとして、人々に親しまれた、といわれている。空也上人は平安中期の僧。空也念仏の祖。諸国を巡歴して南無阿弥陀仏の名号を唱え、教化に努めた。「菩提の花」の菩提は、悟りの境地、極楽往生。仏の智恵。花は、はなはだ優れたもの。「摩頂して」の摩頂は、仏が弟子に教えたり誉めたたえたりする時に、頭をなでること。ここでは自分の頭をなでることであろう。

良寛の秀句・私選12吟

1. ほろ酔いの足もと軽し春の風
2. 夢覚て聞ば蛙の遠音かな
3. 須磨寺の昔を問えば山桜
4. 同じくば花の下にて一とよ寝む
5. 散桜残る桜も散るさくら
6. 鉄鉢に明日の米あり夕涼み
7. いざさらば暑さを忘れ盆踊
8. 盗人に取り残されし窓の月
9. 蘇迷盧の訪れ告げよ夜の雁
10. 雨の日や昔を語んやれふくべ
11. 行く秋のあはれを誰に語らまし
12. 倒るれば倒るるままの庭の草

〈評釈〉

1. A little tipsy

I'm unsteady on my feet
in a spring breeze.

良寛遺墨中に見られるこの句は、おそらく良寛の父以南の句であろう。しかし、花見酒と洒落込む酒好きな良寛などを髣髴させる名句ではある。厳しい仏道の修行を貫いた生涯をおくった良寛であるだけに、ひとり蹣跚と家路を辿る景色は、まことに微笑ましい。

上記の句は、川口霽亭著『良寛の俳句』や村山砂田男著『俳句のある風景』には採られている。谷川敏朗著『良寛全句集』では、安永8年刊『俳諧既月笠』に以南の句とある、と断定している。(試訳では、I am…

とせずに、I'm… とした。酔つ払って呂律が回らないときの英訳では、このように表現したほうがよいのではないか、と考えた。）

2. 友人で医師の原田鶴齋の詩歌集に書き込まれている。詞書に「山寺に宿りて」とある。良寛は蛙の声をこよなく愛した。うるさいとは決して思わなかった。

句意は、「春の夢から目覚めて、聞くともしに耳に入る音は、遠くで鳴く蛙の声である。その鳴き声が遠くなったのは、もう明け方のせいだろうか。」というほどの意味で、明け方近くなると、蛙の声もすっかり弱まっている。良寛は蛙の大合唱を大自然の交響曲として、肯定的に捉えていた。

良寛の和歌に、「草の庵に足さしのべて小山田の山田の蛙聞くがたのしき」がある。作家・中野孝次は、「自分はいま草庵の中で足ながながと伸ばしていて、この状態で遠くの山田の蛙の鳴声を聞いていると非常に心がたのしい、とうたう。まことに単純なことをうたっているのに、歌にいのちがあるのは、そのどこにも良寛の実感がこもっていて真実だからだ。」と書いている。（『良寛 心の歌』参照）良寛は、「足さしのべて」というこの一語で、草庵の中のくつろぎ、悠々自足している自分の状態を表現している。

3. この俳句は、「須磨紀行」と言われる遺墨の冒頭にある。はるばると須磨寺に詣でて、昔の源平合戦のことなどに想いを馳せると、それに呼応するように、はらはらと山桜の花びらが散りかかることだ。須磨は源平の古戦場として知られ、須磨寺には、源平合戦で落命した若武者・平敦盛の「青葉の笛」が奉納してある。熊谷次郎直実は、源頼朝をして「日本一の剛の者」と称えられた武将であったが、一の谷の戦い（1184年）で、自分の息子と同年代の平敦盛を討ち取ってからは、戦場に姿を見せなくなり、出家して法然上人の弟子となった。

須磨寺や吹かぬ笛きく木下やみ （芭蕉）

木下闇は、夏木立が鬱蒼と茂って昼でさえ暗いさまを表す。

また良寛には若いころ、桜の名所をたずねた「吉野紀行」といわれる紀行文もある。この吉野には、良寛が私淑した西行の歌や芭蕉の句が多いので、良寛の詩心を誘うものは多かったのであろう。若き日の良寛は健脚で好奇心の旺盛な青年であったと想像される。

つとにせむ吉野の里の花がたみ （良寛）

4. どうせ野宿して一夜を明かすのであれば、桜花爛漫の樹の下で寝よう。そうすれば、気分は華やいだものになるだろう。この句は西行の名歌「願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ」に影響されたであろう。西行の歌には、釈迦への帰依の念と、あくなき美への希求が示されている。釈迦の命日は2月15日であったから、西行はその日に死亡したい、と願っていた。

良寛の初句「同じくば」のフレーズの奥には、釈迦に帰依し、西行に私淑し、さらに美を求めた願望が秘められている。良寛の俳句は思索を伴ったものがあることを見逃してはならない。

5. Falling cherry blossoms

And the remaining ones

Will soon fall.

本句は、人間の運命を暗示している。人はその寿命に長短はあっても、必ず死すべき運命にある (Man is mortal.)。枝から離れて散る桜のはかなさ、また落花の瞬間のはかない美しさにこそ目を向けるべきであろう。良寛研究家の相馬御風の書いた文章に、良寛禅師の重病の際、「何か御心残りは、と人間ひしに、死にたうなしと答ふ。又辞世はと人間ひしに、散桜残る桜もちる桜」とある。

良寛を師と仰ぎ、良寛の老愁をなぐさめた貞心尼の『蓮の露』には、「うらを見せおもてを見せて散るもみぢ」が記録されている。巷間、良寛作と信じ込まれ、ひろく口ずさまれてきた。

6. 鉄鉢てつぼつは、修行僧が托鉢する折に持つ鉄製の器である。鉄鉢の中には、托鉢で施してもらった米が少しある。明日食べる粥の分の米があれば大満足である。何も思い煩うことはない。乏しくても衣食住が整っている。これで気分は安らかである。さて、夕暮れ時の涼みを楽しもう。

良寛の最も有名な漢詩の一節に「囊中三升米、炉辺一束薪」がある。袋の中には托鉢で施された三升の米があり、囲炉裏のそばには、山から折って来た一束の薪がある。これで何も思い煩うことはない、心の充足がある、というのである。

7. 旧暦の7月に入ってもまだ暑い。さあそれならば、その暑さもなにかも忘れて、今宵は祖霊を迎える盆踊りに、踊りふけることにしよう。

良寛の逸話には、良寛が盆踊りを特に好んだというものがある。良寛は手拭いで頭を包み、女性の仕草で踊るのであった。「おや、あの踊り上手な娘は、どこの娘だろう」というのを聞いた良寛は喜んで、「人

がわたしのことを娘と間違えて、どこの娘だろうと言っていたよ」と自慢して話したという。

良寛の姪が、和島村籠田の庄屋に嫁いでいた。盂蘭盆のころ、良寛は毎年のように同家に滞在して、女性の着物を借り、女装して、盆踊りの輪に加わったという。

8. 詞書に「五合庵へ賊の入りたるあとにて」とある。杉木立を洩れて月光が五合庵に差し込んでくる。逸話によれば、無一物といってもよい良寛の庵に、時々盗人が入ったらしい。庵の中には目ぼしい物は何ひとつないので、良寛は自分の着ている着物を脱いで、盗人に与えたという。窓から外を眺めると、盗り忘れた月だけが、明るく輝いていることだ。

この句には、良寛のおおらかさ、ホスピタリティ（友愛）、自然を愛する気持ちが滲みでている。良寛は庵の庭に出てみると、月は淡く中天にかかっていた。「よかった、よかった、わしも無事だったし、お月さまも盗まれなかったよ」と月との対話の中で一気に作詠されたもの。

谷川敏朗著『良寛の生涯と逸話』には、五合庵時代の逸話として、取るものがないのでがっかりしているどろぼうを見て、良寛は気の毒に思い、着ていた着物を脱いで与えた、とある。また大島花東著『良寛全集』には、乙子神社時代の逸話として、良寛は寝返りをうって、垢じみた布団を泥坊に取らせた、とある。良寛はひとり暮らして、鍵などかけなかったため、たびたび盗賊に入られたものか、「禅版布団持ち去る」ではじまる「逢賊」（賊に逢ふ）と題詩がついた良寛の漢詩がある。

9. 蘇迷盧は、仏教上の世界の中心にある山。帝釈天の居城があるといわれている。「夜鳴いて大空を渡る雁よ、お前が常世の国の使いだというのならば、どうか蘇迷盧におられる父上の消息を知らせておくれ」というほどの句意である。

良寛の父・以南は寛政7年（1795）7月25日、京都の桂川へ入水自殺したと伝えられる。60歳だった。「訪れ告げよ」の良寛の叫びが雁の声と響き合い、哀切モードを高めている。雁は死後の国の使者とされる。「訪れ」は、消息、動静。

10. 雨の日は訪問者も稀であるし、かといって自分から出かけることも気がすすまない。そこで古びて欠けた瓢箪と、懐かしい昔を思いだして話すとしよう。

良寛はいつの昔話をしようとしているのか。おそらく『論語』にみられる顔回がんかいのことであろう。

他の良寛句に「春雨や静になづる破れふくべ」があり、芭蕉句に「もの一つ我が世は軽き瓢かな」がある。

筆者は、2001年5月、北京大学での「世界良寛学会」で「大愚良寛と中国」と題して講演した。その際、河北大学の陳俊英老師の案内で顔回廟を訪問した。

孔子の高弟の顔回は、清貧にして、徳行の人であった。わずかな食べ物と飲み物で、貧しさの中で学問を楽しんだという。かつて紅衛兵であったという屈強な体格のガイド氏は、「顔回は言葉は少なく善行の人であり、いつもにこにことして孔子の言葉に耳を傾けていた。」と語ったのを記憶している。日本の文学にも「顔回筆瓢」の語句でしばしば登場する。

11. 句意は、「秋の季節は過ぎ去ろうとしている。もの悲しく晴らしようもない思いを誰に話したら分かってもらえるのだろうか。」である。「あはれ」は、しみじみとした趣をいう。「まし」は、実現不可能なことを希望する、反実仮定の助動詞。この語には、哀愁感がただよう。山の木々の葉も散りはじめた晩秋に自己消滅へ向かう思いも込められているであろう。

本句の後に「藜籠あかざこにれて帰る夕暮れ」と付けた良寛歌がある。遺墨には、伝遍澄筆といわれる最晩年の良寛立像賛がある。

連句を切り捨てた子規の俳句革新以降のわれわれは、発句を単独な作品として読むことに慣れていて、芭蕉が心血を注いだ付句の世界を知る機会が少ない。

凡兆ぼんちようの「さまざまに品かはりたる恋をして」に芭蕉は、「浮世の果は皆小町なり」と付けた。人情句とは、叙景句に対して、人物や心情を詠んだ句をいう連句用語。漂泊の俳人としての芭蕉のみが芭蕉ではないのだ。(宮脇真彦『芭蕉の人情句』参照)

12. The grasses of the garden,—

They fall down,
And lie as they fall.

文政13年の夏、この年の暑さは、越後では記録的なものであったという。そのために良寛は体調を崩してしまった。すでに死病が身体をむしばんでいた。この句は、良寛の死を暗示しているようだ。良寛も自分の死期の近いことを予知して、布団の上に病臥しながら、倒れ伏した庭の草花を眺めていた。「庭の草」は、良寛自身に他ならず、ここまでくると即興的とはいえ、清らかな心が詠み込まれている。

この良寛の句は、高校の国語教科書に載っていた短歌、「甕にさす藤の花房短ければ畳の上に届かざりけり」を想起する。子規庵の「病床六尺」の畳の上に横になって、子規はこの歌をうたったのである。

會津八一の俳句の特徴

「地方的特色をして鮮明ならしめよ」と説いた秋艸道人・會津八一は生涯に俳句1,293句を詠んだ。明治32年、19歳から俳句にしたしみ、昭和4年、49歳までの31年間にわたった。作句を始めた頃は、子規が独自の写生理念をもって句誌『ほととぎす』を発刊していた。八一も投句して、鳴雪選になる八一の一句が『ほととぎす』(M.32.6)に掲載されているが、これをもって初度とする。(秀句1.参照)八一は明治35年の春に内藤鳴雪を訪ねている。鳴雪は八一が若々しい青年であるのに一驚している。理由は、『ほととぎす』に連載された「蕪村句集講義」の合評で、「閻王の口や牡丹を吐かんとす」の詞書に「波翻舌本吐紅蓮」とあるのを書家が解きあぐねているのを見て、この詞書は「舌本を波翻して紅蓮を吐く」と読み、「説法のあとで、今の教えは虚妄ではないぞと、広長舌を示して誓うことだ」と評釈し、法華経、阿弥陀経、碧巖録などを博引した一文を投じている。であるからして、鳴雪は、てっきり仏典に通じた老僧か何かと思ひこんでしまっていた。(『會津八一俳句私解』参照)

八一の句の内容や句柄から考えて、子規の俳句革新の唱導に随った句作のように思われる。最初は調べがやや硬直で、こなれていない感はあるものの、句詠を進めいくうちに、八一独自の呼吸に合った句風が醸しだされるようになった。『ほととぎす』の募集した俳句の選者をつとめたのは、子規、虚子、鳴雪、碧梧桐などで、数人の選者が月々交代で募集句を選んでいった。八一が子規を訪問し、実作にとりくんだ最初の数年の進歩はめざましく、若年の作とは思えぬほどの写生のよさがある。句作にはおのずと張りがあり、生気があふれる。才知のひらめきで一句をまとめる手法も獲得した。子規を訪問した翌年、弱冠20歳で『東北日報』と『新潟新聞』の2社の俳句選者となった。句作に手を染めてからわずか3年たらずでその地位を得たことは、たとえ地方の俳壇であったにしても、八一が実力ならびに啓蒙家であったことは事実であろう。彼は、「地方的特色」「郷土性」を強調して、「越後人は越後人らしき句を詠め」と要求した。それは、越後の大地をしっかりと踏まえた、人間の声の表現への要求でもあった。既述のように、漱石をライバル視して、漱石と自分を比肩するなど、自信満々であった。これにより、作句数もおのずとふえてはいるものの、選者の呼び

かけに応えた地方の投稿者のレベルの低さが、選者の作句力もいつしか低下させている。これは俳人・八朔郎としては不幸なことであった。

會津八一の俳号は、八朔郎といった。八朔郎の俳句は崇拜者の子規の影響もあって、素直な写生風の表現も見逃せない。写生の手法も多く自作にとり入れている。しかし、彼の俳句には、一茶の傾向が時代を経るごとに強くなっていったように思われる。一茶流の韜晦とうかいもなくはない。それに八朔郎は蕪村をたいへん讃仰していた。蕪村に傾倒するあまり、蕪村の句「春の水山なき国をながれけり」を自作と勘違いして色紙に揮毫して門下生に与えたりしたこともある。

八一の早稲田中学校の教頭時代を描いた、小笠原忠の『鳩の橋』には、上記の逸話が書き込まれている。蕪村熱もそうとうなものがあったようだ。一方では年を経るにつれて、才にたよる傾向が見受けられ、玉石混交と変わっていったようにおもわれる。また、理知的諷詠、滑稽諷詠も散見されるようになった。

會津八朔郎の秀句・私選12吟

- | | |
|---------------------|-------|
| 1. 家主に薔薇呉れたる轉居哉 | (明32) |
| 2. 蝶蝶や洛陽に入る午下り | (明33) |
| 3. 暮るる日の獅子座に飛ぶや赤蜻蛉 | (明33) |
| 4. 雀蛤に女は何に蛇の皮 | (明34) |
| 5. 毗に天地青しほととぎす | (明40) |
| 6. みみずくの赤き眼や露時雨 | (明41) |
| 7. 陵の青葉に潮の遠音かな | (明42) |
| 8. 白魚や小佐渡をめぐる草まくら | (明42) |
| 9. 山鳩や麦穂の果ての杉の中 | (明42) |
| 10. 秋風や知らぬといへば知らぬなり | (大 2) |
| 11. 裾野まで雪一刷毛の春日哉 | (大 4) |
| 12. 雲裂けて星みだれ飛ぶ涼しさよ | (大 6) |

(5.8.10.11.12は俳人・黒田杏子選「八朔郎 俳句の世界」H.20.10.4.)

〈評釈〉

- この一句は『ほととぎす』6月号に掲載されたもの。一句は「薔薇・茨」の課題応募入選句。選者は内藤鳴雪。上村占魚著『會津八一俳句私解』によれば、「(鳴雪は) 子規日本派の原動力となり、且つ後見職の

役目も果たした。和漢の学に通じ、脱俗飄逸な人柄と相まって、日本派の長老として一門の尊敬と親愛を集めていた」とある。八朔郎は明治35年に鳴雪を訪ねた。

さて一句は、家主は大家さんのこと。薔薇は「そうび」とここでは読む。「家主に」「薔薇呉れたる」「轉居」切れ切れにいった調子がよく、しかもさりげない感謝がたくされている。明治32年といえ、八一はまだ18歳であった。

2. この一句は『ほととぎす』6月号に掲載。正岡子規、高浜虚子共選「蝶」の課題応募入選句。「洛陽」は京都の別名。なんとのおびやかな句であろう。現代の俳句の瑣末主義とは無縁のおおどかな一句。
 3. 八一は明治14年、新潟市の古町に生まれた。8月1日生まれの彼は、獅子座を若いときから好み、「おれはもともと獅子座の住人なのだが、縁あってこの地球に生まれてきた。縁つきれば、また獅子座に帰ってゆくのだ」とも言っていた。夜空の星座を見るのが趣味であった八一らしい、スケールの大きな一句。
 4. 「雀海中に入り蛤となる」、「雀化して蛤となる」という長い秋の季語がある。故事・俗信『ことわざ大事典』によれば、「古くから中国で信じられていた俗信で、雀が晩秋に海辺に群れ騒ぐところから、蛤になると考えられたものという。ものが変わりやすいことのたとえ。」とある。俳人・八朔郎は、簡潔に「雀蛤」と用いて初句に工夫がこらされている。雀蛤とは、72候の一つ、寒露の節の第2候に当たる10月12日頃に、雀たちは海水に入って蛤になるという。まことに荒唐無稽の話であるが、雀と蛤の文様が似ているからであろうか。昔の人々は、里雀が少なくなった現象を海で蛤になったためと理解した。例句に「蛤となれぬ雀の庭に来し」(民雨)がある。「蛇衣を脱ぐ」、「蛇の蛻」は、江戸期から夏の季語とされる。蛇は一年に何回も脱皮するが、梅雨あけの時季から蛇の活動が活発になり、脱皮も多い。金運のお守りにもされる。例句に「蛇の皮脱ぎてかけたる桜かな」(許六)がある。
- さて、句意は「雀は海に入って蛤になるというが、さて女たちが一体何に変身するのであろうか。さしずめ蛇の衣ぐらいであろうか、と思ひめぐらしている」。占魚はこの句を評して、『何に』のところで、一寸語呂に休止をあたえ、『蛇の衣』とおいた手際が見事で、新しい。自由無礙な詠いぶりなから、特色のある作といえる。」と的確な評釈である。
5. この句の詞書には「達磨像に讚を望まれて」とある。

ほととぎすの鳴く頃は、もう若葉や青葉が生い茂り、青々とした山

野は生气に満ち満ちている。翠色は目にやさしいといわれている。眦は「めじり」のわけであるが、ここでは目にあふれんばかりに、と解したらよい。野山の翠のほうからこちらの懐に飛び込んでくるような色彩を捉えた句。句意は「清々しいほととぎすの声を耳にして、その方向へ顔を向け目をみはると、万緑が目にあふれ、爽やかである」といった趣である。天地という大景をうまく単純化し、眼がしらから眦へ、尾を引くような動体視力で捉えた、すばやいほととぎすの飛翔と癒しの自然の翠色が見事に描写されている。

6. 俳諧では、落葉の散る景を「落葉雨」、団栗などの木の実の落ちるのを「木の実雨」という。「露時雨」は時雨そのものとは違い、露が樹木の枝々から時雨のようにしとしとと零れ落ちるさまの形容である。この句の「赤」と「露時雨」のとり合わせのうらに、技なきうら技を秘めている。自然で厭味がない。

八朔郎も得意の句であった証拠に、「ある日、すずろに一句を口ずさみて自ら大いに感じ、一家の風格を思ひ定め侍る」（桜井天壇宛）と私信に見える。

これは八一の発句の傑作中の傑作で、代表作の中でも、十指中の一句であろう。

「赤」という色彩についての考察であるが、八一の絶唱「山鳩」は、よく斎藤茂吉の「死にたまふ母」と題した四部作「帰郷」、「死別」、「葬儀」、「高湯」と比較される。茂吉の挽歌は、色彩も音調も鮮やかな詠風である。茂吉は31歳の若き日にこれを歌ったが、八一は戦禍で秋艸堂を焼かれ、郷里の知己に身を寄せる65歳の老残の日々にこれを歌った。

八一は、赤色嗜好が強く、その俳句や歌の作中にもとりこまれ、作品に精彩を与えている。下記に短歌3首を紹介する。

- ① 恨み侘び立ち明かしたるさ牡鹿の燃ゆる眼に秋の風吹く
- ② 夕されば岸の殖生による蟹の赤き鋏に秋の風吹く
- ③ 悲しみて出づれば軒の繁り葉に たまたま赤き石榴の花

①は、角を打ち合っただの争いに負けて、雌鹿を得られなかった牡鹿の悔しさを歌にしたものである。一夜を眠ることもできずに過ごした、血走った赤い眼が印象的である。大正10年頃の作品で、八一は早稲田中学の教頭職にあり、自分の理想とする教育理念の推進に悩んでいた。

②は、八一の旅情の一抹の寂しさを秘めて、沢蟹の赤い鋏の印象あざ

やかな一点に焦点をあてて描写している。(①②は『南京新唱』参照)

③は、「山鳩」の掉尾を飾る一首である。(『敬和学園大学研究紀要』第18号の拙稿参照)

斎藤茂吉は「くれなゐの茂吉」と呼ばれるように、茂吉の歌の多くに「赤色」が詠いこまれ、効果的であり、また印象的である。

のど赤き^{つばくらめ}玄鳥ふたつ^{はり}屋梁にゐて足乳根の母は死にたまふなり
あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり

茂吉は明治37年子規の『竹の里歌』に逢着して、自分の気性に合ったせいか、模倣することができた、といている。茂吉の子規への傾倒は、写真道へ彼を進ませたといいよい。藤岡武雄は、「子規は自然のありのままの姿をスケッチ風に描いた歌が多いが、茂吉は構成的にかなり主観的な色調をもちこんで描いている」と対比している。(新潮日本文学アルバム『斎藤茂吉』参照)

7. この句には「真野にて」の詞書がある。^{みまさぎ}陵との関係から、この句は「真野御陵」を詠んだものであることは明白だ。一般には地元の人々に真野御陵とって親しまれているが、順徳上皇火葬塚という呼称が正しい。承久の変(1221)で佐渡への遠流の身となった上皇は、在島22年、46歳で遷御した。遠流の地の佐渡島での孤独な生活の中での作詠に、「思いきや雲の上をば余所にみて真野の入り江に朽ち果てんとは」がある。

『小倉百人一首』の掉尾を飾る歌、「ももしきや古き軒端のしのぶにも猶あまりある昔なりけり」(歌意：大宮所の物古りた軒端の忍ぶ草を見ると、耐え忍ぶ身のごろにつけて、偲びきれない遠い昔がそぞろ恋しくなることよ)は、順徳院の20歳の折りの作詠である。宮中の古い建物に生えている忍ぶ草によって象徴されているのは、何よりも皇室の権威の衰退である。「しのぶ」は「しのび草」との掛詞。偲んでも昔は現れてくれず、耐え忍ぶ心は色にでてしまう、と言っている。この歌の詠作の5年後、承久の乱で鎌倉方に敗れ、佐渡に配流されることとなった。順徳院は和歌を定家に学び、しばしば歌合せを催した。

ちなみに、歌人・斎藤茂吉は、昭和16年(1941)4月末、佐渡へひっそりと来て、ひっそりと帰っていった。「佐渡小吟」という珠玉のような短歌52首を残したことはほとんど知られていない。松籟の聞こえる阿仏坊妙宣寺には、県下唯一の五重塔があり国宝。また境内には、

正中の変に流されて斬首された、日野資朝卿の墓がある。「いつくしき 五重の塔の たてる見つ 佐渡の心は 浅からなくに」は茂吉の妙宣寺での詠。また作家・司馬遼太郎は、1976年10月中旬、数日間佐渡に遊び、次の短歌を残して去った。

海越えてはろけき北の島に來し 旅にして泌^{しむ} 没^いり日反照^{しょう}

吉池 進の827頁にも及ぶ大著『會津八一傳』を開けば、八一は有恒学舎の英語教師時代、明治42年5月16日～24日まで、学生を引率して「佐渡修学旅行」の監督教授として参加した報告書が残っていることが記述されている。

学舎主・増村度治に宛てた「旅行報告書」の中で、仁治3年9月12日に佐渡で崩御された順徳上皇のことを「御絶望あらせられ御絶食にて御崩御ありし御骸を火葬し奉りしはまさに此のところなりと、思へば当年御悲憤の御涕まで目に泛ばすといふことなく、一行は沈痛なる感慨に充ちて黙々として帰途に就けり。」と感懐を吐露している。

八一の一句は、順徳院の佐渡島遠流の日々のみ心にも触れているかと思うと哀れをさそう。また囁目すべきは、「青葉に潮の遠音」という言葉の運びの見事な佳句である。

8. この句には「佐渡新町にて」の詞書がある。「草まくら」は、草を結んで枕とし、野宿をする意からして、「旅まくら」にひとしい。佐渡真野湾には、国府川と石田川が注ぎ、ここでは白魚が獲れる。白魚のように淡白な旅詠である。
9. この句は、明治42年の佐渡島宿根木での吟である。山鳩の声は、初夏の群青の空に吸い込まれるように遠くの杉林から聞こえてくる。麦田を渡る海風は爽やかである。

八一は、東京下落合の2か所の秋艸堂で、小鳥飼いに熱中して、さまざまの小鳥を飼い、とくに鳩の類をいつくしんだ。鳩（dove）は旧約聖書のノアの方舟やオリーブの葉を連想させ、平和、柔和、純潔などのシンボルとされる。

次頁の①の詠句は、八一の秋艸堂の生活の中から生まれたものであろう。吉野秀雄は、「客観的にいっても、かなりの秀逸ではないだろうか」と述べているが、上村占魚は、「鳩がクルクルコロコロと喉をならすさまを「ねごと」とした擬人法が第一低俗だし、「終夜」にしてもおおげさすぎはすまいか」といっている。筆者は占魚の説に軍配をあげたい。

②の句には、「葉師如来讚」の詞書がある。桜井安枝宛の葉書に認められている。安枝の父は桜井天壇でドイツ文学者、母のたかは、八一の実妹である。鳩の類をいつくしんだ八一の優しい心の現れとして、初句に「はとの子」を置いたのではないか、と思われる。中七の「まもらせたまへ」は、詞書と相まって、さらに深いものになっている。

③の短歌は、晩春のもの憂い季節、庭（落合秋艸堂「村莊雑事」と同じ庭園）の茂り立つ柳の葉がくれに、つがいの鳩が来て、平安に眠っている姿を見かける日が多い、というほどの歌意である。大正13年前後の作と推測されるが、八一の気に入りの一首で、番い鳩の絵と共に作品を揮毫している。

④の短歌は、挽歌「山鳩」で、絶唱〈山鳩4首〉（『敬和学園大学研究紀要』第18号の拙稿参照）の作詠の後、観音堂を去った八一が、寄留先の丹呉邸の敷地内の桜桃の木に登って詠んだとされる一首。観音堂で、死にゆくきい子と共に聞いた山鳩の声とは似て非なるものがある。サクランボの赤く熟した実を口に含んでいると遥かに続く水田の彼方の森から山鳩の声が聞こえてくる。時の流れは、痛々しい心の傷をも癒してくれるようだ。

良寛の和歌⑤の「この宮」は、新潟県分水町国上の乙子神社であろう。谷川敏朗著『良寛全歌集』の歌意には、「長くて、なかなか明けないうちに、目がさめて耳をすますと、この宮の林に、山鳩の声が響いて聞こえることだ。」とある。

- ① 終夜鳩のねごとや冬ごもり
- ② はとの子をまもらせたまへさよしくれ (T.15.2.15)
- ③ 春たけし庭の柳の葉がくれに鳩ふたつ来て眠る日ぞ多き
- ④ 桜桃の枝に登れば聞こえ来る水田の果ての山鳩の声 (S.21.6)
- ⑤ 長き夜に寝覚めて聞けばこの宮の林に響く山鳩の声 (良寛)

10. この句には、「寒月翁の達磨の畫に讚す」とある。一句には八一の性格の一端が詠み込まれている。「知らぬといえぬ知らぬ」と一言で言い放ったあたり、八一のある決断がうかがえる。秋風の爽やかさと共に、ぶれない八一の自信が浮き彫りにされていると感じられる。代表作の一句である。また、「秋風や寂しく強く美しく」という秀句もある。

良寛は、自己を客観視して、「秋風に独り立ちたる姿かな」と詠んだ。肌寒い秋風が吹きつけるなか独り立ちつくして、自分はどのよう

に生きるべきか、そしてまた世の中の人々のためにはどうしたらよいか、思い悩んでいる。また芭蕉は、「野ざらしを心に風のしむ身かな」と吟じた。孤独、寂寞、悲愁といった情調が投影されている。

11. この句には、「御殿場にて」の詞書がある。今井安太郎宛の書簡に記されているもので、おそらく即興的な諷詠であろう。詞書からして、「裾野まで」が富士山の裾野を指していることはいうまでもない。うららかな春日に、陽を浴びて白く輝く富士の雪の美しさを讃えた秀句である。汚れない雪の輝きを「雪一刷毛」と大きなスケールで受け止めている。
12. この句は、中禅寺湖畔に遊んだときの吟。飛瀑の様子など自然界の変化を視覚的に、感情をこめて捉えている。占魚は「才の利いた句だが、才を表にみせないで、ふくらみと余情あるものになしている」と評している。

あとがき

良寛の漢詩「芭蕉翁の讚」には、芭蕉を称えたものが残されている。これ以上の讚仰はないと思われるほどの表現であるが、芭蕉の俳諧の底にある人間性や宗教性をも合わせて評価したのであろう。

是翁以前無此翁	是の翁以前に	是の翁無く
是翁以後無此翁	是の翁以後に	是の翁無し
芭蕉翁兮芭蕉翁	芭蕉翁	芭蕉翁
使人千古仰此翁	人をして	千古是の翁を仰が使む

また、良寛も八一も芭蕉の「座右の銘」、「芭蕉語録」とされる下記の一句や文言も周知の事実であったであろう。

〈座右の銘〉

人短勿言・己長勿説（人の短を云うことなかれ・己が長を説くことなかれ）

もの言えば唇さむし秋の風

〈芭蕉語録〉

「不易流行」（芭蕉俳諧の理念で、新しみを求めて変化していく流行性が実は俳諧の不易の真髓であり、不易と流行とは、根本において結合すべきものであるとする。）

「高く悟りて俗に帰るべし」
 「文台引下せば則ち反故」
 「松のことは松に習え、竹のことは竹に習え」
 「言ひおほせて何かある」

最後に良寛の和歌における『万葉集』への傾倒を付言すると、良寛は阿部定珍所蔵の『万葉和歌集校異』（文化2年版）を熱心に精読した。それは、当時流行した加藤千蔭著『万葉集略解』の新しい読みを、古い『万葉集』に朱墨で注を書き込むためであった。定珍の依頼により、良寛は与板の回船問屋三輪権平所蔵の『万葉集略解』を借りて、朱注書き入れの努力をした。以後の良寛の歌は、全く良寛調に変わってしまうのである。

さかのぼって国学と和歌の本流を引き継いだ加茂真淵（1697-1769）の『万葉集大考』（1769）は、その独創的な注釈や直観的なひらめきに富む新訓により、今日でもその価値を失っていない。真淵の日本文学への貢献は、歌作よりもむしろ歌学にあった。彼のいう「ますらをぶり」（『万葉集』）と「たをやめぶり」（『古今集』、『新古今集』）などの対比の論考はよく知られている。彼は「古歌」の「ますらをぶり」に惜しめない敬愛を捧げた。のちに斎藤茂吉らの短歌革新の理念の原点ともなった。

真淵の門弟たちは、歌道、歌学、国学など、多方面にわたって師の道を継承していった。その中には、真淵が生涯にたった一度、それも松坂での一夜を語り明かしたただけの人に本居宣長（1730-1801）がいた。宣長は感覚と感性によって「物のあはれ」（the pity of things）を知ることが文学の本質と考えた。本居は、『源氏物語』の作者・紫式部の創作目的を、蓮の花を咲かせるために泥水を集めることに例えている。「物語に不義なる恋を書けるも、その濁れる泥をめでてにはあらず、物のあはれの花をさかせんかてぞかし。」といている。

また日本人の情感に訴えかけるもののひとつに、秋の野山を彩る山野草がある。秋の七草（萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、桔梗）や吾亦紅などで、いずれも優しく、細く、弱々しい。「物の哀れは秋こそまされ」（『徒然草』）と兼好法師はいうが、むべなるかな、と筆者は思うのである。

宣長は「敷島の大和心を人問はば 朝日に匂う山桜かな」という有名な歌を残している。武士道の象徴は桜の花であった。彼の美学の基調になっているのは、「あはれ」であり、『万葉集』にも感嘆や畏敬を示す語として用いられた。しかし、彼は歌の本質は、人間のもっとも深奥な感情の描出にあると考え、「ますらをぶり」を詩歌の理想に置くことはなかった。む

しろ、「たをやめぶり」こそ文学の本質と考えたのである。彼は新古今集調の艶麗ばかりではなく、そこに人間感情がもっとも巧みに表現されていると考えたのである。

ちなみに歌人・若山牧水は、大正11年の3月下旬に伊豆湯ヶ島の湯本館に滞在して、山桜の歌を23首詠んでいる。下記の歌は、古今の名歌といわれている。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花

(上記の加茂真淵と本居宣長についての記述は、ドナルド・キーン著『日本文学の歴史』8 近世篇2を参照)

付 記【ドナルド・キーン (Donald Keene) 氏のこと】

本稿でも度々参照させていただいた、ドナルド・キーン著『日本文学の歴史』(全12巻)は、氏のライフワークである。日本文学研究に半生を捧げたキーン氏が深い愛情を込めて、単独執筆した魅力溢れる日本文学の通史である。

第1巻(古代・中世1)の「まえがき」の冒頭で、著者は「外国人が日本の読者に日本文学史を発表しようとするには相当の勇気を要する。いくら日本語ができるとしても、幼時からなじんでいる日本人ほど言葉の音楽的な魅力を感じとれないだろうし、そのために日本の詩歌を評価する場合、『調べ』というものを無視して意味しか考えない恐れがある。」と述べている。

第1巻には、「平城京遷都で花開いた唐風文化」に詳しい記述がある。それ以前には、天皇が変わるたびに遷都があったが、710年に奈良に永続的な都が築かれた。いわゆる平城京遷都である。今年(2010)は平城京遷都1300年という節目の年に当たり、おおきなイベントの企画がいくつもある模様である。

一昨年(2008)は、源氏物語千年紀に当たる年であった。具体的に何をさして千年紀というのか詳らかではないが、紫式部の日記によれば、寛弘5年11月(西暦1008年)に、一条天皇と中宮彰子の前で、『源氏物語』を朗読したことが書かれている。ともかく2008年11月には、天皇・皇后両陛下のご臨席を賜り、「源氏物語国際フォーラム」が京都で開催された。この国際フォーラムにおけるキーン氏の記念講演は「私の『源氏物語』」であった。講演の冒頭で、「私が初めて『源氏物語』を知ったのは、

1940年（昭和15年）、ニューヨークのタイムズ・スクエアにあった本屋だった。（略）そんなある日、箱入りの二冊の本を見つける。それは『源氏物語』のアーサー・ウヰリリーによる英訳本で、値段は49セント。その安さに驚きながら、家に持ち帰って読んでみると、そこにはまったく未知の世界が開けていた。」と語り起こしている。当時、キーン氏は大学生で、金もなかったので、売れ残った本や掘り出しものを探しまわっていた。

キーン氏は、外国人として初の文化勲章受章者に選ばれた。講演のあとで、皇居での受章式を数日後にひかえ、天皇さまは、「もうすこしでまたお会いできますね」という優しい言葉をキーン氏にかけられた。

天皇陛下は、おそらくドナルド・キーン著『明治天皇』を熟読なされたことであろう。上下巻で1,000ページを超える大著である。高円宮憲仁親王が崩御された時、この『明治天皇』が親王の棺に納められた。明治天皇は、明治という激動の時代を指揮し、日本史上もっとも有名で謎の多い天皇で、われわれ日本人を今日に導いたのはこの偉大な指導者であった。

降る雪や明治は遠くなりけり （草田男）

昨年（2009）7月11日にドナルド・キーン氏が茶色のポストンバックひとつを携行して、新潟駅の駅頭に降り立った。「越後国・柏崎 弘知法印御伝記」という説経浄瑠璃の公演（7月11日～12日）が新潟市で開催されるので、その観劇にやってきたのだ。「弘知法印御伝記」の正本は、元禄時代に浄瑠璃本として海外に持ち出され、数奇な運命をたどってきた浄瑠璃である。ゆかりがある新潟県の地元で結成された越後猿八座によって、300年ぶりに舞台に復活された。

この物語は、自らの道楽がもとで妻が殺され、二人の息子たちと別れた放蕩三昧の男が改心して、高野山にのぼり、7年の厳しい修業の後、六根清浄の大知識（高僧）となり帰郷し、やがて即神仏なるまでの波乱万丈の物語である。14世紀に即神仏となり、現在も野積の西生寺に安置されている弘知法印がモデルである。

日本橋で説経浄瑠璃をしていた江戸孫四郎が、年代など大きく変えて物語にし、貞享2（1685）年ごろに舞台にかけたらしい。近松門左衛門が活躍する以前の古浄瑠璃は、昔話や英雄、高僧などの物語が多く、あまり知られていない地方の僧の話は珍しく、貴重な古浄瑠璃であるといえよう。いうまでのなく、古浄瑠璃は、近松の浄瑠璃ほど文学的な面白さはない、とキーン氏は話している。

この古浄瑠璃は、江戸時代の初めの貞享2年に出版されて上演されたが、7年後の元禄5（1692）年に、ドイツ人医師ケンペルが長崎の出島から幕府の禁を犯して持ち出したようだ。船の積み荷の下に「日本の印刷したものや手書きの資料」を隠した、と彼の日記にある。キーン氏によれば、ヨーロッパの古い宮殿や図書館には江戸時代の和本がまだ隠れているだろう。どうしてかという、三百数十年前から西洋人が日本を訪ねることがあり、日本のお土産として持って帰ることが簡単で、あまり高くない絵入り本を買う習慣があった、という。日本語を読めない人でも面白い絵を喜んだであろう。日本人は読み捨てたであろう本も、外国では宝物として珍重され、大切に扱われていた。

日本では『弘知法印御伝記』の原本の残存が確認されておらず、昭和38（1963）年に当時ケンブリッジ大学で教鞭を執っていた、早稲田大学の鳥越文蔵氏が大英帝国博物館で正本を発見、翻刻出版した。この浄瑠璃本は刊行以来、陽の目を見ずに300年という長い間、異国で冬眠していたのだ。それを発見した鳥越氏は、コピーをして持ちかえり、それをキーン氏に見せた。2007年1月、キーン氏は、文楽で三味線弾きをやっていたが、新潟に帰っていた鶴澤浅造氏から「新潟で人形浄瑠璃をやりたい」と相談されたので、キーン氏は、浅造氏に越後角太夫という芸名を与え、地縁があって面白いから、とこの古い浄瑠璃の復活を薦めたのである。また佐渡の文弥人形の人形遣いでもある西橋八郎兵衛氏を始め人形遣い全員の芸名が鳥越氏により命名された。人形遣いのひとりに、大学でフランス語を講じる碧い目の女性も含まれていた。座員は一人でひとつの人形を操る。

浄瑠璃・越後角太夫氏の三味線弾き語りの名調子に合わせて、女に化けた魔王、天狗、クマ、オオカミ、クチナワ（大蛇）などが舞台狭しと、空を飛んだり、走ったり、はたまた人形の首が宙に舞ったりで、エネルギーの溢れた舞台では、笑いや拍手も起きた。いかなる時代の文学よりも、江戸文学に笑いの要素が強いというのは、それが明朗闊達で、あけすけな庶民の文学であるからであろう。どんなにつらく、せつない時でも、彼らは庶民的なユーモア精神を失うことはなかった。

「さんざめきながらみたであろう、江戸の人々の姿さえ想像できる素朴な楽しさがあった。」と由里氏は、見事な切り口で記事をまとめている。この時代にタイムスリップすれば、新発田出身で赤穂義士となった剣豪・堀部安兵衛が江戸の町を闊歩していたであろう。もしかして舞台にかかった「弘知法印御伝記」を覗いてみたかもしれない、と思うとロマンを感じざるをえない。（H.21年9月10日付『朝日新聞』の由里幸子氏の記事参照）

昨年（2009）、64回目の終戦記念日のちょうど一か月前、ドナルド・キーン著『日本人の戦争—作家の日記を読む』が上梓された。たちまち初版を売りつくして重版にかかった、と版元の知人から聞いた。筆者も一読して、キーン氏ならではの切り口とまとめ方には、いつもながら感心するばかりであった。現在は、『正岡子規』を鋭意執筆中とのことである。日本人はどのような風に外国の知識を自分のものにして、日本の文化をより豊かにしてきたかというのが氏の執筆の動機であるという。

朝日のインタビュー記事によれば、「87歳でなお、コロンビア大学で教壇に立っています。失礼ですが、老いということを感じることはないですか。」という問いに対して、キーン氏は、「ありません。私は自分のことを、まだ未熟だと思っています。」と答えている。

日本文学研究家として、絢爛たる業績を誇りながら、学者としてまだ未完成であるという意識が、氏をあそこまで駆り立てるのか、と思ひ半ばに過ぎものがある。（『朝日新聞』2009.9.30）

今年は、平城京遷都1300年を記念して、メモリアル・レクチャーのオフナーやらその他の大学などでの記念講演の依頼などの打診があると聞かすが、キーン氏も今年で88歳になられるからして、できるだけ講演などは控え目にして、書齋にひき籠り『正岡子規』などの著作に専念していただきたい、と私的には願っているしだいである。

そもそも江戸時代の俳諧もはじめは滑稽を看板にして出発した。その俳諧の落とし子ともいえる川柳は、庶民的で風刺とユーモアに富んだ民衆詩といえよう。本稿では、江戸時代の俳人たち、特に芭蕉、蕪村、それに一茶の俳諧に関しては、『日本文学の歴史』などで、ドナルド・キーン氏からの学恩を受けたことを特筆して、感謝の意を表したい。